2008年11月　埴野謙二　『米騒動」の場所

はじめに

今日は、東京からお二人の論客というか、あるいはアクティビストというか、においでいただいて、この方々のお話を聞くことの方が私たちにとっては大事ではないかと思います。ただ、お出でいただいたお二人に対して、失礼にならないためには、お招きした方からもほんの簡単なことでいいから、何か言ってみることをした方がいいのかなと思い、若干用意しました。

今、平井さんから、骨の太いお話を聞きました。この後、山口さんから東京のフリーター労組の現場の話をしていただくことになると思います。米騒動自体の若干の補足をしたいと思います。

全部話すと何時間もかかる話になりかねません。平井さんが大きな線を引いていただけたので、それを補足するようにしたいと思います。

i　『米騒動』が呼んでいる

お手元の資料を見ていただきながら、ごく簡単に進めていきたいと思います。資料の12ページ[図. 4]というのがあります。それを見ていただく前に、付け加えますが、私の中で「米騒動から 90 年」は、去年から考えていたことでした。当初は、平井さんもおっしゃいましたが、どちらかというと「68 年から 40 年、米騒動から 90 年」という文脈で「米騒動 90 年」を考えるという感じが強くありました。それが今年に入って、むしろちょっときざっぽい言い方ですが、「米騒動が呼んでいる」という感じになることが度々あって、「68 年から 40 年」というのは、もういいことにしようと考え、「米騒動から 90 年」というものをさらに気にするようになってきました。

それのきっかけになったことについて、私が補足すること自体に関わりありますので、簡単に言います。今年の 1 月の半ば頃から「野宿者」といいますか、「路上生活者」といいますか、「ホームレス」といいますか、そういう人たちの支援を始めてきたという経過がありました。その中で、そういうことをやることに関わる者の集まりの名前を「困民丸」とつけました。「困民丸」ですから船の名前みたいなものだと思ってくだされば いいわけです。「この厳しい荒波を、木造船の大変危ない、いつ水漏れして沈没するかわからないような『困民丸』が船出する。」そういうイメージをもちたかったわけです。

そのとき私の頭にあったのは、先ほどお話にありました「困民党」のことでした。まさに「困民党」というのは、さっき平井さんが十分言われましたが、自由民権運動に隠れてしまっている面があって、「困民党」そのものというのは一般的には付属物のようにみられているところが有るような気がします。研究者の間では、それ自体一つの自立した民衆運動として、この 20 年くらいの間に蓄積された研究が結構あります。それを読んでいて

大変面白かったんですが、そういうのを研究者の間では「負債農民騒擾」という言い方をしています。明治新政府になって今までと間尺が違う市場経済の波に投げ込まれていくわけ。資本主義というものが後発的に作り出されていくわけですが、その中でさっきもありましたように従来の金貸しの範疇をこえるような銀行とか、いろんなものが出てくる。農民たちは「地租改正」とかを含めてべらぼうな負担を強いられていく。それに対して近世以来の伝統的な民衆運動の様式をよみがえらせる。簡単に言ってしまえば、昔の幕藩体制では、ある藩があってそこの藩主というのは、藩の中にいる民・百姓について、確かに時代によって年貢を取り立て、厳しい収奪をするわけですけども「人の道に外れた政治は行わない」というふうなことだと民衆達は思っているわけです。「権力者が人の道に外れたような政をするときには俺達は立ち上がるぞ」というのが百姓一揆を含む民衆の運動だった。例えばその時に何を言うかといったら、金を借りてたことに対する取立てに不満を持って立ち上がっている場合なんかだと「年賦を 100 年にしろ」「利子はゼロにしろ」とかべらぼうなことを言いいます。そのべらぼうなことを言うこと自体が一種の文化であるというか、それを聡明な藩主が受け止めて悪辣な商人をたたくとか、そういうふうなある種の伝統的な様式がずっと続いてきてる。そういう流れの近代における最後の輝きみたいなものが「困民党」だったと言っていいだろうと思います。そういう意味では「自由民権運動」とは関係がないわけではないけれども、確かに「自由民権運動」が開いたある種の「自由」という観念の影響がなかったわけではないでしょう。それとは別に自立した民衆運動だったというふうに言っていいのではないかと思います。そういうことを考えて「困民丸」という名前をつけました。それは今年に入って私が「米騒動から 90 年」というものを自分の中で考えるときに「ああ米騒動が呼んでるなあ」という感じをもち始めてきた最初のきっかけみたいなものでした。

それからごく最近のことで「麻生邸リアリティツアー 」については、お隣の山口さんが、リアルに語ってくださると思います。「麻生の土地だけ、建物だけで 60 何億とかいう所を見に行こうぜ」というすごいユニークなアクションを考えられた。東京の渋谷に集まって、さてこれから歩いて行こうかというところに、全くめちゃくちゃな警察からの弾圧を受けました。「弾圧」というよりなんなんでしょうか。よくわからないけれども殆ど信じられないことでした。何もしてないのに、これから麻生邸へ行くというだけのことで 3 人の人が逮捕されて長いこと留置場に入れられていました。一応現在の段階は外へ出ているようですけれども、まだ警察が態度を決めたわけではありません。山口さん達は「麻生邸リアリティツアー」というものの一環として麻生に対して団体交渉を申し入れるというのをやられた。権力の側は何を怖がったのか、何を恐れて高々４０～５０人の人達に対してあれだけの凶暴さをもって襲いかかったのかと考えてみると、おそらく私の想像では、次のようです。「騒動」とか、昔の言い方で「騒擾」と言いますけど、むしろ「騒擾」といったほうがいいような感じなんだと思いますが、「騒擾による団体交渉」という言葉があります。

これはイギリスの民衆史家が言ったそうですが、近代以前の特に食糧暴動なんかの場合に、騒動を起こすことで団体交渉をしていました。例えばパン屋を相手になるのかもしれないし、小麦を買い占めている日本でいえば米穀商みたいのがあるんだと思いますが、そ

ういうところに対して滅茶苦茶に全く米騒動と同じように「安く売れ」とか、むしろ民衆の価格に対する自己決定を迫るわけです。そういうふうなことを「『騒動による団体交渉』といったほうがいい」とあるイギリスの民衆史の研究者が言ったそうです。私は山口さん達がやろうとしたことをおそらく警察はそういうふうに捉えたのではなかと後知恵で思った。何を怖がったかといったら、ほんの４０～５０人の人達が団体交渉を求めて歩く、動くというそのアクション自体が今何を喚起してしまうかということを恐れたんだろうと思う。そういう意味では、権力は一方ではちゃんと見ているわけです。無茶苦茶なことをやっているけれども､それは恐るべきものになる可能性があるぞというのがわかったわけで、そういう意味では、やった方もあっぱれだけど無茶苦茶逮捕した方もあっぱれだった。今まさに状況がそういうところにきている。とても象徴的なことでした。私はそれを見てますます「ああ米騒動が呼んでいるな」という感じを受けました。そんなことで「米騒動から９０年」というのを少しずつ考えてみたんです。

ii　国民―「客分」―民衆運動

さっきの[図. 4]のところへ戻ります。ごく単純化して、時の流れを図形で表すというのは非常にナンセンスな話だし、どだい無理なことですが、上手く言うために何かやり方が必要だなと思ったんです。いろんなピースをはめていって絵を完成させるパズルみたいなのがありますが、[図. 4]を考えてみました。

その三角形 ABC というのは、話の都合上作った図形で、A は国民、B はこれはちょっと説明が必要ですが「客分」という言葉で見てほしい。C は明治末から大正期にかけての社会運動です。11ページ[図. 1]というところを見ていただきたいのですが、明治末から大正期という時間の流れを ABC という点を結んだ三角形の中にまず置いてみます。ABC のそれぞれの関係性というものはどう動くかということで、その三角形の中にいろんな断片を入れていってみようと思うわけです｡それが私がやろうとした極めて乱暴な手法です。平井さんの非常に洗練された話の後に何をしゃべっても鈍くさいことにしかならないなあという気がして憂鬱なんですが、ちょっとだけ我慢して付き合っていただきます。

この図を考えていく上で一番ポイントになるのは、A が国民だっていうのは、これはご存知でしょうが明治以後近代国民国家というものを後発の位置から加速度的に形成していくことが日本列島の空間には必要だったわけで、それが絶えざる国民化として明治以後ずっと続きます。それがあるところまでいったときに日清戦争、日露戦争で「戦争のため、戦争で命を捨ててもいい国民」というものを一方で形成していく。と同時にロシアとの講和条約で、「俺の息子や俺の父親、私達の兄、そういう人達が殺されたわけだけど、それに対して国はいったい何をしてくれるのか」というような反応がいわゆる日比谷の「焼き討ち事件」として現れる。つまり A は「国民」というふうに近代以後、日本の空間に初めて存在した者を A と表したわけです。C というのは今の場合でいえば明治末から大正期にかけての社会諸運動のことです。

問題は B ということですが、これが一番ポイントなので、資料の１、１ページの[註. 1]というところを見てください。ご存知の方もおられると思いますが、私はわりあい最

近になって知った人なんですが牧原憲夫という日本の近代民衆運動史を専攻している人がいます。その人の「客分と国民の間・近代民衆の政治史」という９８年に出された本があります。これは大変おもしろい本でして、その中で「客分」という言葉をとても重要なキータームとして使っています。[＊1の①]を見て下さい。これはその本の裏表紙についていた惹句です。惹句とは人をひきつける言葉をいいますが、これはそれにあたるものです。そこの最初のところだけ見て下さい。「外国に支配されようが徳川の世の中に戻ろうが飯さえ食えれば文句ない。明治初年の民衆はこう嘘ぶいた。そこには近代社会への反発と政治から切り離されたことによる客分意識が横たわっていたのである。だがその人々がやがて対外戦争に同調していったのはなぜか」というようなことが、この人の本の中で追っているテーマです。今ここで気にしていただきたいのは「客分」ということです。もう少しそのことをわかっていただくために③、その隣の[＊1の③]を見て下さい。ちょっと大事なところだけ言いますが「なるほど大多数の民衆の主要な関心は日々の安穏な生活をいかに確保するかにあり、政治なんてものはあいつらの仕事だと思っていただろう。が同時に彼らは生活に追われながらもアイツラをじっと横目に見ている存在でもあったはずだ。という期待が私の民衆イメージの底にある。『客分』とは明確な一つの政治スタンスであっていわば『万年野党の心意気』といったようなものなのだ。これに対して政治運動は最終的には権力の掌握や権力機構への参入、すなわち与党を目指す。権力を追う主体とすれば、客分というのは権力から逃げる主体といってもよい。そのどちらもが政治的な主体である。統治され啓蒙される客分（オブジェクト）であるがゆえに異議申し立て（オブジェクト）する担い手となる。それが客分としての民衆のあり方である。」「客分」というのはここに書かれた感じでとりあえず頭の中においていただけたらと思います。これは私が先ほどの平井さんのお話を伺っていて感じた印象で言えば、「客分」というものの現代的な変容といいますか、現代的な姿といいますか、近代以後の姿といいますか、そういうものが平井さんの言われる雑民性というものとかなり深い関わりがあるのではないかと思って聞いていました。

12 ページ[図. 4]に戻ります。さっき言いましたいろんな断片をピースとして当てはめていって肝心なものを浮かび上がらせるというやり方でやっていきますと、まず図の OBP という下のほうの三角形があります。これが先ほどから言っている伝統的な民衆運動にあたるものです。これは明治以後の秩父困民党を最後の輝きとするかのように運動としてはそこまでの系譜があるわけですが、もちろん「客分」意識というものはその後もずっと存在していくわけでして、これが米騒動に流れ込んでいるといっていいと思います。それを担い手のレベルでいうとまさに、さっき平井さんが言われたように、「米騒動」の担い手という意味で見ていただきたいのです。つまり伝統的な民衆運動に足を置いているのが「米騒動」なんですが、その「米騒動の主要な担い手」というのは、線分 B2 と書いたところ見て下さい。まさにさっき平井さんが言われている雑民性というか、つまり都市下層民、その中身としては窮民というくくり方もありますし、貧民というくくり方をされている人達もいますし、細民とくくられている人もいるし、都市雑業層としてくくられている人達もいる。いずれにしろそういう都市下層民と都市下層社会から近代的な工場労働者層が析出されてくるというか出てくるというか、そこのところがまだ連続性として存在している

というのが、まさに「米騒動」期の日本の民衆の実相だったんだと思います。ですからそういう意味で「米騒動」の担い手というのは、まさにこの連続性、都市下層社会民とそこから完全に離陸しきっていない近代的な工場労働者層、姿を現し始めているが離陸していない、その連続性がまさに「米騒動」の担い手であったといっていいんだと思います。

三角形 OBP というところは伝統的民衆運動なわけですが、これは洋の東西を問わずだいたい近代以前の近世期といわれるような時期に全世界的に存在したいわば食糧暴動というのがあるわけですが、その食糧暴動のバリエーションが日本の場合ですと百姓一揆だったりするわけで、それの輝きをもった、殆ど最後に近いものだったと言っていいのではないかと思います。ですから民衆にとって、いわゆる近代が進むにしたがって資本主義経済、それの自由至上経済の中に巻き込まれていくわけですが、そのポリティカルエコノミーに対して、いかにモラルエコノミーといいますが、例えば明治でいえば天皇なら天皇という頂点にある権力者は「人の道に外れたまつりごとを行ってはならない」というのが「客分」からしたときの権力者像であって、そういう仁政という儒教の徳の一つで仁とか義とか礼とかありますが、その仁とまつりごとの政です。要するに権力者に対して仁政を求める。つまり徳義があるモラルエコノミーを求める。モラルエコノミーというのは、経済であれそれは単なる資本主義という自動的に回転していくもので市場を成り立たせるのではなく、いわば「経世済民」といいますか、世の中を整えて民衆を救う、そういうモラルにたった経済こそがわれわれが求めているものだという、そういうアピールする力を民衆はもっているんだぞというのが「客分」が心の底に静めている伝統的な権力観であったということだと思います。それが噴出してくるときに、「自分たちに納得できる価格で米を売れ」とか自分たちが食べられないのにどこかへもって行かせないぞということが、ある種の普遍的な価値として周りの人たちにも認められる。日本の場合も近世以来そのような系譜を生み出してきた。それのいわば近代における最後の輝きとして「米騒動」があったのではないかという、そういう意味で伝統的な民衆運動に足をおいているわけです。

同時にご存知のように一方で明治末、それから大正の本当に初めのほうに少しずつ、明治国家のもっていた国民に対するしばり方が資本主義経済の発展にともなってどうしても緩んでいかざるを得ない。その中で大正期に開く社会諸運動が少しづつ進み始めるわけですが、そういうものの機運に支えられている面も、もちろん一方にあったと言っていいのだと思います。線分 PQ のところから黒い矢印がありますがそれはそういうことをあらわしています。そういうふうなものとして米騒動があったので、米騒動自体は、そんなに複雑なものではなくて民衆運動としては非常にシンプルだと言っていいんだと思います。ただそれがどういう時代にあったかということによっても、生まれてくるある種の特殊性は当然あるわけですけども民衆運動の歴史からすれば米騒動というのは実にシンプルなものだといっていいんだと思います。

ⅲ　「米騒動」と「社会の発見」

そういう「米騒動」に背中を押されて大正デモクラシーと呼ばれているある不思議な時代が流れます。ですからそういう意味で、また後で言いますが、「大正デモクラシー」の背中を押したという側面が米騒動には確かにあった。それは簡単に言えば、当事のこの列島の空間における民衆の各層は、いわば連続性をもって担ったということがそれ以後、米騒動以後、社会諸運動が多様に展開される大きな促しになったと言っていいんではないかと思います。

その次に、もう一つ三角形でいうと上の方の AOQ というところです。AOQ のところが支配というものがあったあり方を示す場所だと思っていただきたいのですが、「米騒動」によって何が一番大きいことが起こったかといえば、明治以後ひたすら馬車馬のように加速度的に国民化されてきたこの国の国民が、もう一つ社会という平面における存在であることが一方あらわになってくる。つまり国民であることと社会の構成員であることとが、相対的に区別されてくる。そういう意味で大正期を「社会の発見」期というふうに言うようなことがあります。そういう意味での「社会」というのが浮上してくるのが大正期のある種の特質だと思うのですが、登場してくる社会という平面に対してどのような統治というものを作り上げていくのかというのが、「米騒動」によって危機感に陥った当時の支配層の大きな課題だったんではないかと思います。つまり明治以来の統治のあり方を変容しない限り米騒動からもたらされた危機感というものを解消できないというのが当事の支配層のあり方であったのではないかと思います。それは普通は「大正デモクラシー」という範疇でいえば「普通選挙運動が進んで、初めての本格的な政党内閣ができた」という言い方で「大正デモクラシー」というものを語っていきます。私は「大正デモクラシー」という年号がついたデモクラシーというのは全然よくわからんというか、あまり理解できないのですが、とにかくいろんな思想がどんどんいろんなところから輸入され、いろんな人達がいろいろ動き始めた、そういうことは確かにあったんだと言っていいんだと思う。ただそれは、先ほどから言っていますように「米騒動」というものが後押ししているということによって初めて可能だったものなんだろうなあと思います。

「米騒動」というのは簡単に言えばそういうことで、もう一つ大事なことを言い忘れましたが今の［図. 4］の底辺のところに P というところがあります。これはその当時、「米騒動」のまさに今、燃え盛っているその渦中、大正 7 年の 9 月に、今もありますが「中央公論」という雑誌が、その当時出始めて、そこに当時の新進気鋭の経済学者、これはマルクス主義系経済学者でも何でもないんで、どういったらいいんでしょう、非常に複雑な変遷を遂げた人ですから何とも言いようもないんですが、福田徳三という後では一橋大学かなんかになるようなところに籍を置いていた人が「中央公論」で「米騒動」のことを論じます。それがちょっと大事なので19ページの［註. 9］を見て下さい。「このたびの騒擾は、畢竟するに極窮権（＝ RIGHT OF EXTREME NEED）極端な、極端になった、必要を満たす権利ということだと思いますが）の実行に他ならないのである。政治家どもが政権の争奪をもって政治一切万事なりとして有頂天になっているのみで、政治とは、畢竟、民の生存を保障し安全にするを第一とすることを全然忘却したに対する人民自衛権の発動とよく

すべきものである。旧幕時代にも、（幕府時代ということですね）しばしばあった。（さっき言っていた伝統的な民衆運動、特に百姓一揆とかそういうのに現れた伝統的な民衆運動のことだと思っていただけばいいんですが）欧州にもこの先例はいくらもある。（これはいわゆる食糧暴動といわれるもの全般を指していると思います。）畢竟人民はたいていの悪政治には我慢もし、辛抱もするが、それが国民生存権の尊重をあまりに閑却するときは極窮権の実行という変体をとってあらわれてくるのである。（昔の言葉なので読みにくいが）、変体というのは、わかりますね。それで少し先にいったときに、線を引いておきましたが）米価の奔騰のために（要するに米価が上がったってこと）極窮権に押し落とされた。」人々が行ったことが極窮権の実行だということ、それが「米騒動」だということですね。この福田徳三という人は大変おもしろい人で、この時代はそういうこと言うし、この前後で「生存権」をいち早くいろんな形で「生存権の経済学」とかいうことを言ったりするんです。やがてアジア太平洋戦争に向かうよりはるか以前にこの人は「厚生経済学」なんていう本を書きます。昭和 15 年厚生省ができますが、「厚生」という言葉はその辺から支配層からワーッと使われるシンボル用語です。この人は、いち早く厚生という言葉を使ったりして、大変ユニークな人です。その人が言っていた「極窮権」という言葉が割合いいなあという感じがもてました。さっきの 12 ページ[図. 4] に戻って、三角形 OPQ というのは「極窮権」が蜂起する場所、それが「米騒動」の場所だったのではなかということです。

話が前後して恐縮ですが、私は「米騒動」とは何かという問いを、つまり自分の中にいつのまにか住み着いた米騒動のイメージをもう一度取り出しておさらいしてみたい、あるいは復習してみたいという欲求で、今みたいなことをやってみました。そのことで私の中でザワザワ音をたてている、ザワザワ騒いでいる米騒動というのが私を呼んでいるというのを自分なりに実感できるかなあと思ってこんなことをやってみたのですが、私の見当はそんなに違ってはいなかったと自分自身では思っています。

いろんなことをはしょって簡単にお話しました。最後に付け加えたいので11 ページ[図. 2] の下の所を見て下さい。「国民たあ俺っちのことかと八の言い」という牧原憲夫という人の本の中にこれに類する言葉があるんですが、ちょっと私が変えて使ってみました。この感じって分かっていただけるだろうなあと思います。これがまさに「客分」なんです。「八」っていうのは、まさに「八つぁん、熊さん」の八です。つまりさっき平井さんが言われた長屋の住人。ご隠居にいつでもたしなめられたり、おだてられたりして舞い上がったり沈み込んだりしている、庶民像が凝集されたようなものだと思います。まさに「客分」意識というのは、「八つぁん」の中にあると言っていいようなことなのだろうと思います。それでまず「国民たあ俺っちのことかと八の言い」というのは、まさに「国民であることを強いられること」と、「『いや違うんだよ俺は毎日食うことで忙しいんだよ』と言っている」ことの二つがまさに共存しているというところに「客分」というあり方があるということを言いたいためにそれを言いました。

[図. 3]のところに同じように悪ふざけをして川柳めいたことをまた並べてみました。「世慣らしは、後の祭りかと熊の言い」今度は熊さんが言うわけです。自由民権運動は、いわば「政治的な自由」を主張した運動ですが、伝統的な民衆運動が近代に入ってから展

開した「困民党」を含むああいう運動は、理念としては社会的平等を言っていると考えたほうがいいと思います。それを「世ならし」と江戸時代には言ったと思うんで「世慣らしというのをやってみたいんだけど、どうも後の祭りなのかなあ」というのが熊さんの嘆きなわけです。

次は12 ページです。まさに「米騒動」期を、「客分」である八つぁん熊さんはどういうふうに受け止めたかというと、まさに当事者だったわけで、一目散に火をつけに走ったとか、そういう人たちだと思うんですね。「それはこの酔い心地だけはと八、熊の言い」この「酔い心地だけは」というのは、米騒動にたまたま関西で遭遇した大杉栄が、後に一種の詩になっているとは思えないけど、一種の詩の文体というか、詩の文型を使って表現したある文章があります。それが「この酔い心地だけは」というタイトルがついています。まさに米騒動を音として表現している。当時、「未来派」の詩人達が、わりあいこういう擬音を詩の中に使うことがはやっていたように思います。その一つをまねしているんだと思いますが。今お渡ししている資料集の一番最後です。実は正直言うと原典をあたっておりません。人の文章か、人が使っているものから引用したのでちょっと不完全かなあと思います。20 ページを見て欲しいのですが、要するに単にローマ字です。ただ「わぁ」とか、「バラバラッ」とかいうのは「石投げた」とか「ガラガラ」とか「瓦落ちた」とか「ドシンとぶつかった」とか「落ちた」とか。あとは「わ」っていう怒号なわけです。そういう擬音を入れながら、まさに騒動っていうのは何だっていうのをわりあいと短い文章の中で適切に言っているように思います。つまり短い「酔い」なんですね。それまで自分にかぶせられていたものを全部取っ払ってまさに自分の目で、自分の頭で、自分の手で、自分の体で見たり聞いたり動いたりする。それはほんの短い「酔い」の中でやっているみたいなものだろうと。それはやがて覚めるだろうと。だけどその時、その人間はまさにその人間自体なんだというのが大杉栄の生命主義に基づいた主張になっているのを表現していることになると思います。

12 ページ目に戻ります。「その酔い心地だけは」というのは大杉栄の文章の引用のつもりです。もう一つ付けましたのは、「騒動たあ、俺っちの華よと八、熊の言い」つまり「客分」が政治に向かうときに、そのもっとものぼり詰めたあり方が騒動なんだということです。「それは俺達の華なんだよ」あるいは「俺」、俺って言うと女性が入っていないことになるから良くないんだけど「俺達の色気よ」っていうか。「騒動っていうのは俺達の色気なんだよ」というふうに言ってるんだろうと私は思います。「客分」がいわば「燃えるとき」というのはそういう時なんだろうなあというようなことです。ついでにそういう悪ふざけをもうちょっとだけ言いますと、「大正デモクラシー」のところの[図. 5]ですが「デモクラシーたあ俺っちのものかと八が言い」「革命たあ、主になることかと八の言い」、これはわかっていただけるでしょうか？要するにデモクラシーっていうのは当時の日本という空間に即して言えば、帝国内デモクラシーです。しかも大正という年号のついたデモクラシーです。ですからこれはもう間違いなく括弧をたくさんつけなければ説明できないデモクラシー。当時の有名な言葉で言えば、「民本主義」といわれた、つまり主権を問題にしないデモクラシーというのが「大正デモクラシー」で最も正確な表現になるのではなかと思いますが。「それが俺っちのものなのか」と八が斜め半身になって言っているわけで

す。「革命たあ」というのはこれは大正期の半ば以降、いわゆるボルシェビズム史観が日本に入ってきますから、そういうところでいわれる革命というのを頭に描いていただければいいんで。「あぁ革命っていうのは俺が主人公になることなのか」と言っているわけですね。「そんなものなのか」というのが八の言いたいことです。

その次の[図. 6]ですが、「米騒動」以後の支配層の危機感に基づく統治の再編成です。その中の一番中心的な問題は何かというと、「社会的なものを日本的に構成する」ということです。これはだいたい西欧にしたって 19 世紀終わりから 20 世紀にかけて、現代の福祉国家の前身に当たるようなものが用意されてくるわけですが、その日本的な形が「米騒動」の後の危機感の中でいち早く着手されていきます。[図. 6]の三角形の Q というところが、まさのそのことをあらわす点だと思っていただきたいと思います。簡単に言えば、「米騒動」を可能にした、さっきの平井さんのお話の中にあった「雑民層」を分断するというか、階級分断するというか、ヨーロッパの歴史の研究者の中で使われてきた言葉で言うと、労働者階級と「危険な階級」とを分断するという、そういうことにあたることが大正期に様々な社会政策、社会立法が展開される中で進んだというふうに考えていいのではないかと思います。

現在私達が社会保障、社会福祉といっているようなものの原型のおおよそが、この時期に、米騒動によって作り出された支配層の危機感がいち早く着手したことが社会的なものを通した統治というものを作り出していくことを曲折したということです。熊さんが言うには「社会たあ客をいたぶるものかと熊の言い」というふうな、そんな感じになるわけです。

iv　「客分と社会運動の間」

すごい乱暴なことを乱暴なしゃべり方で言ってきました。最後に[図. 7]を見ていただきたいのですが、結局そうやって、「米騒動」の場所、「米騒動」の位置というのはどういうものなのかというのを気にして見ようとしました。見た上で何が残るかといえばやっぱり、「客分と社会運動の間」という問題が残るなあというか、そういう問題なんだなあという感じが最後にありました。さっきから乱暴な言い方で言っていますが、「米騒動」とは伝統的な民衆運動の末期の場所だったし、「大正デモクラシー」の背中を押す場所でもありましたし、社会へ通ずる統治へと曲折していく、政治が曲折していく場所でもありました。

じゃあ、ところで「客分」は、その後どこへ行ったんだろうということが大きな問題だと思います。もしかしたら息も絶え絶えと現在まで生き続けてきているのかも知れません。あるいは、さっきの「革命たあ、主になることかと八の言い」というふうに、「客分」が逆立ちして革命の主体になる。これは明らかに革命という概念が引き寄せる逆立ちですね。そういう逆立ちをすることで生き延びたのか。これは、実は左翼的な逆立ちと右翼的な逆立ちがあって、昭和期に入りますと昭和維新というような言葉が使われたりしますが、いわゆる昭和維新から日本ファシズムにいたるその時期に、客分たちは皆、右翼的な逆立ちをしていくことになります。

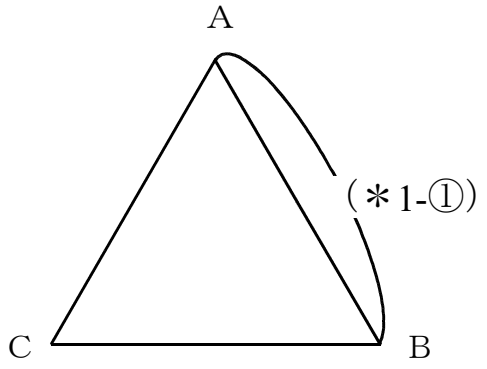
それとも、そんなことにも関わりなく最後まで社会のお荷物であり続けようとしたのか？そういうことが大きな宿題として「米騒動」期以後、現在までつながる問いとして残されているのではないかと思います。

さっき「素人の乱」という話をされましたけど、私はあれは現代的「客分」のスタイルというか、そんなふうな感じで見たら自分には一番ぴったりするなあという感じがあります。現代的な「客分」のスタイルというのはもっと考えたり作り出したりしないといけないと思います。この間、世間を賑わしている、前厚生労働次官の人が殺傷されたりしている件ですが、私はあれは「客分」というものの現代的スタイルを私達が見つけ出していない象徴だなあと思いました。ですから山口さんたちの、私の言葉で言えば「騒動による団体交渉」、そういう言葉の広がりの先にもしかしたら現代的な客分のスタイルというものを新たに見つけ出したり、作り出したりする可能性があるのではないかと密かに思ったりしています。「客分」というのは支配がある限り間違いなくいつでも存在し続けるわけです。江戸時代には間違いなくスタイルがあったわけだし、それは多くの人によって共有されていた。残念ながら明治以後、逆に「客分」を逆立ちして主体化させる様々な社会変革思想は日本の中にたくさん流入してきましたし、日本でいろいろ付け加えたりもしましたけど、「客分」というものをついにそれ自体として自立させる思想というのは今のところなお完全に生まれたとは言い難い時代が続いているかと思います。

「客分」という大変魅力的な言葉に出会ったものですから、客分という言葉にとらわれて「米騒動」というものを見てみることをしました。大変長くなってすみません。以上で、補足になったのか何になったのか分かりませんが、今日おいでいただいたお二人の方をお迎えする私どもの方からのご挨拶という感じで受け取っていただければと思います。どうも長い時間ありがとうございました。

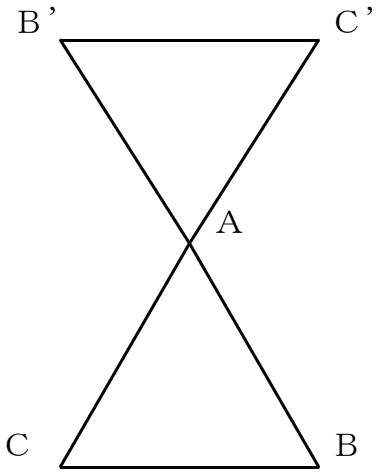
図―１「米騒動」とはどのような場所（ロケーション）であったか？

図．１



A：国民
B：「客分」
C：明治末－大正期社会運動

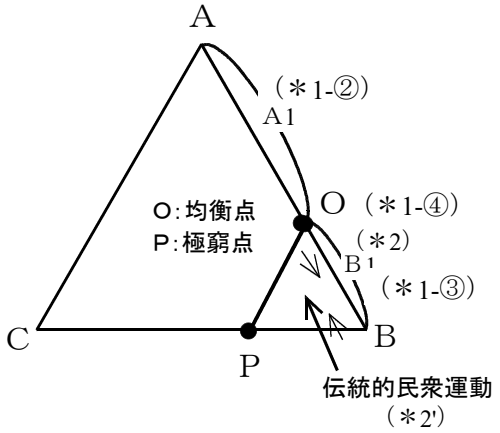
図．２



B’：近代国民国家（天皇制国家の構築）
C’：後発資本主義（の創出と展開）

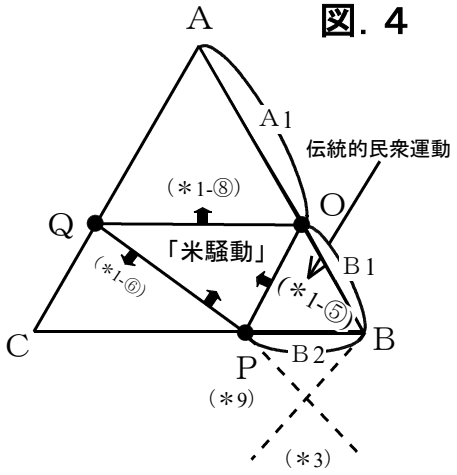
「『国民』タァ俺ッチのことかと八の言い」

図．３



A：subject 主体／ be subjected to ～に従属する
B：object 客体／異議申立てをする
$\overline{\text{A 1}}$：「国民」化／「ポリティカルエコノミー」への包摂
$\overline{\text{B 1}}$：「仁政」－「モラルエコノミー」(「徳義ある経世済民」）の要求
P　：極窮点－「困窮極マレバ」
△ＢＯＰ：<u>「客分」が燃える場所</u>
　　――<u>伝統的民衆運動</u>

「『世ならし』は後（アト）の祭かと熊の言い」



図．4

$\overline{\text{B 2}}$：都市「下層」民（「窮民」・「貧民」・「細民」・都市「雑業層」）と近代的工場労働者層との連続性

P　：「困窮」極マルトコロ

$\overline{\text{OP}}$：伝統的民衆運動の末期の輝き（＊-1 ⑤）

$\overline{\text{QP}}$：前期大正デモクラシーの気運

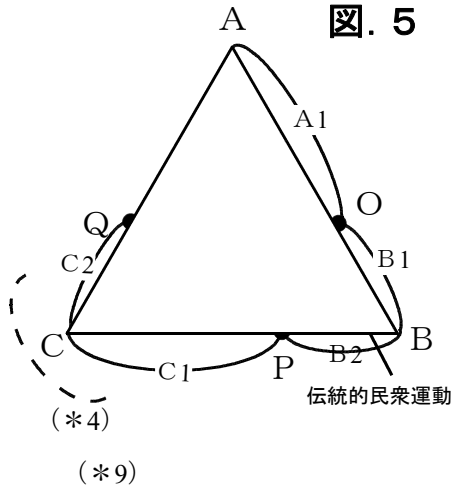
QP：大正デモクラシーへの導火（＊-1 ⑥）

$\overline{\text{QO}}$：統治の修正／変容へのインパクト（＊-1 ⑧）

△ＯＰＱ：「極窮権」が蜂起する場所－「米騒動」

「『この酔心地だけは』と八・熊の言い」（＊10）

「『騒動』タァ俺ッチの華（ハナ）よと八・熊の言い」



図．5

$\overline{\text{C 1}}$：近代的工場労働者層の「下層社会」からの離脱の進行

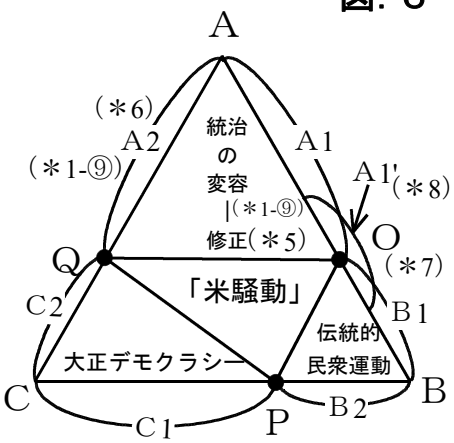
／新中間層の出現

$\overline{\text{C 2}}$：大正期－「前」「古典的範型」期の社会運動（＊ 4）

△ＰＣＱ：社会諸運動が繚乱する場所－「大正デモクラシー」

「『デモクラシー』タァ俺ッチのものかと八が言い」

「『革命』タァ『主（シュ）』になることかと八の言い」



図．6

$\overline{\text{OQ}}$：統治の修正と変容（＊ 1 －⑨）

O　：諸「調停制度」の導入（＊ 7）

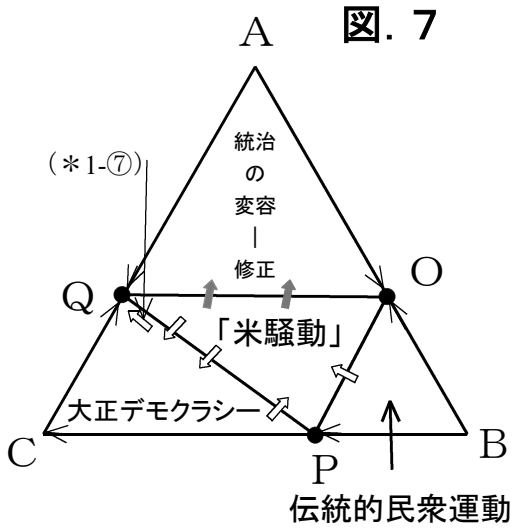
Q　：「社会的なもの」の日本的構成（サレル）

$\overline{\text{A 2}}$　：社会政策・社会立法の展開（＊ 6）（＊ 1 －⑨）

$\overline{\text{A 1'}}$：超「国民」化／「皇民」化の端緒

△ＡＯＱ：「社会的なもの」を通した統治の場所－統治の変容

「『社会』タァ『客』をいたぶるものかと熊の言い」



ＢＣ：「客分」と社会運動のあいだ？

（＊ 1-⑦）

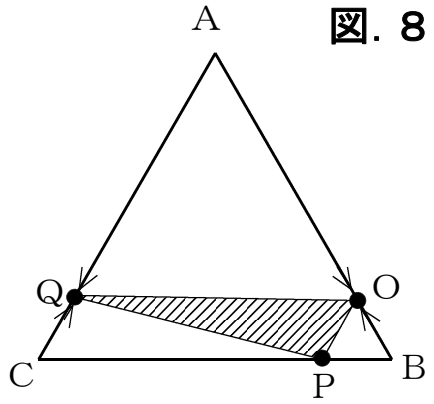
「米騒動」とは

- 伝統的民衆運動の末期の場所だった
- 大正デモクラシーを導火する場所だった
- 社会を通ずる統治へ曲折する場所だった

そして、「客分」はどこへ行った？

- 息も絶え絶え生き続けた？
- にがい逆立ちをし続けた？
- 「社会のお荷物」であり続けた？

社会諸運動の内の〈なに〉が、「客分」とのあいだに最近接した？



$\overline{\text{AQ}}$：「社会的なもの」の縮減

$\overline{\text{AO}}$：ネオリベ「ポリティカルエコノミー」への包摂

△ＯＰＢ：「現代の米騒動」

〈註〉

〈＊1〉　16-17 ページ参照

〈＊2〉　18 ページ参照

〈＊2'〉　18-19 ページ参照

〈＊3〉　「騒擾による団体交渉」

1905「対露講和条約」反対－「日比谷焼き討ち事件」）

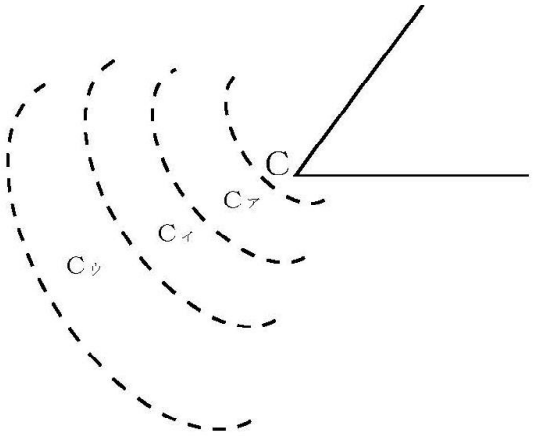
1906「東京市電電車賃上げ」反対－（「都市社会運動」－ 1911「電車市有化」

／1913「電灯値上げ」／1913「ガス値上げ」）

1911　「第１次憲政擁護運動」

1914「外群汚職事件――シーメンス事件」抗議

〈＊4〉　大正期諸社会運動



Cァ：民本主義－社会主義－アナキズム／アナルコサンジカリズム／ ボリシェヴィズム－無産政党運動

Cィ：労働運動（1919 友愛会臨時総集会宣言

「労働者の４大権利」

－生存権・団結権・ストライキ権

・参政権）農民運動・普選運動

Cゥ：学生運動（1918 新人会など）

／女性解放運動（1920 新婦人協会）

／部落解放運動（1922 全国水平社）

／借家人運動／消費者組合運動など

〈＊5〉　防務会議

1914　臨時外交調査委員会

1917　軍需工業動員法

1918　臨時法制審議会

臨時財政経済調査会

〈＊6〉　1917　内務省救護課

方面委員制度

1919　内務省救済事業調査会

1920　内務省　社会課

1921　内務省　社会局
1922　内務省　社会事業調査会
1923　内務省　社会局－外局となる－社会部／労働部／保険部
1923　「社会局参与制」－労働問題に関する常設諮問委員会
1923　内務省　労働保険調査会

1921　米穀法
借地借家法――1925「中央融和協会」
「職業紹介所法」
「住宅組合法」
「労働組合法案」検討
1922　工場法改定／同「施行令」改定
「健康保険法」制定
1926　労働争議調停法

〈＊7〉　1922　借地借家調停法
1924　小作調停法
1926　労働争議調停法
男子普通選挙法

〈＊8〉　1919　臨時教育会議答申－「国体明徴」思想の強化
1921　内務省神社局「国体論史」
1925　軍事教練導入
大日本連合青年団／大日本連合女子青年団
1926　青年訓練所

〈＊9〉　別紙 19 ページ参照
〈＊10〉　別紙 20 ページ参照

資料

（＊ 1）牧原憲夫「客分と国民のあいだ――近代民衆の政治意識」（98吉川弘文館）

①

「外国に支配されようが、
徳川の世の中に戻ろうが、
飯さえ食えれば文句無い」。
明治初年の民衆はこううそぶいた。
そこには、近代社会への反発と、
政治から切り離されたことによる
客分意識が横たわっていたのである。
だが、その人々が、やがて対外戦争に
同調していったのはなぜか。
政治文化の視点から、
国民意識が創出される姿を描き、
近代を問い直す。

②

国民統合の前提と諸要素

(1) 交通（コミュニケーション）網／土地制度／租税／貨幣－度量衡の統一／市場……植民地	←経済統合
(2) 憲法／国民議会／（集権的）政府－地方自治体（県）／裁判所／警察－刑務所／軍隊（国民軍，徴兵制）／病院	←国家統合
(3) 戸籍－家族／学校－教会（寺社）／博物館／劇場／政党／新聞（ジャーナリズム）	←国民統合
(4) 国民的なさまざまなシンボル／モットー／誓約／国旗／国歌／暦／国語／文学／芸術／建築／修史／地誌編纂	←文化統合
(5) 市民（国民）宗教－祭典（新しい宗教の創出），伝統の創出	

※ 西川長夫『国民国家論の射程』（柏書房，1998年）より

国民化（文明化）

(1) 空間の国民化――均質化，平準化された明るく清潔な空間／国境
　　中央（都市）－地方（農村）－海外（植民地）／中心と周縁，風景
(2) 時間の国民化――暦（時間の再編），労働・生活のリズム／神話／歴史
(3) 習俗の国民化――服装，挨拶，儀式（権威－服従）／新しい伝統
(4) 身体の国民化――五感（味覚，音感，……），起居，歩行－学校・工場・軍隊等等での生活に適応できる身体と感覚／家庭
(5) 言語と思考の国民化――国語／愛国心
　　↓
　ナショナリズム
　国民の誕生

※ 西川長夫『国民国家論の射程』（柏書房，1998年）

③

なるほど、大多数の「民衆」の主要な関心は、日々の安穏な生活をいかに確保するかにあり、「政治なんてものはアイツラの仕事だ」と思っていただろう。が同時に、かれらは生活に追われながらもアイツラをじっと横目にみている存在でもあったはずだ――という〝期待〟が、わたしの「民衆」イメージの底にある。客分とは明確なひとつの政治的スタンスであって、いわば万年野党の心意気とでもいったようなものなのだ。これに対して、政治運動は最終的には権力の掌握や権力機構への参入、すなわち「与党」をめざす。権力を「追う主体」と、権力から「逃げる主体」といってもよい。そのどちらもが政治的な主体である。統治され啓蒙される客分（object）であるがゆえに異議申立て（object）の担い手となる、それが客分としての民衆のあり方である（いうまでもなくこれは、「独立」的であるがゆえに臣従的である subject、すなわち国民というあり方の両義性に照応している。なお、客分と object を関連づける視点については西成彦氏から示唆をうけた）。

④

仁政観念を図式的に整理すれば、治者／被治者が分離した政治体制、地域社会における商品経済の日常的な展開、地縁を主とした民衆の社会的結合、この三つを前提的条件とし、民衆の安穏な日常生活を維持することが統治者・富裕者の責務と観念され、その責務の放棄・拒否は私欲優先の不徳なる行為として糾弾されるとともに、不正が放置された場合は民衆が直接に制裁を加える、しかし民衆自身が権力を奪取する意図はなく（上位）権力も民衆の行為を基本的に追認する、といった政治文化である。これはおおむねモラル・エコノミーと共通するのである。

⑤

慈憐の精神を以て救済の方法を講ずるは、所謂富豪の公なる義務と想像す、故に此の際……社会一般の貧民に成り替り……白米一升の価二十五銭に値下げ実行相成る様、御高配切に懇願す、併し万一穏便なる公徳の忠告者たる我曹の此説を馬耳東風と御看過あれば、遺憾乍ら一の非常手段に出づるの外道なし

これは、一九一八（大正七）年の米騒動で、山口県宇部村・沖之山炭坑の労働者たちが、炭坑主で衆議院議員の渡辺祐策や地元の富豪に送りつけた通告状である。「大塩平八郎」と署名されたこの警告の論理は、幕末の打ちこわしや世直し一揆と見事なまでに一致する。かれらはやがて、軍隊との戦闘で死者十数名を出すほどの激しい暴動を起こした。司法省思想特別研究員として、この文書をはじめ多くの収集資料をもとに「所謂米騒動事件の研究」（一九三九〈昭和一四〉年）をまとめた吉河光貞検事も、「単に米穀商に対する米穀廉売の団体的強要に止まらず……富豪並資産家が寄附金を義捐する等、下層民衆の生活難を救済するは、其の社会的義務にして、細民の窮迫を冷眼視するは不徳義も極まれりと做し、之を膺懲せんとする思想」が広く存在し、さらに「之を阻止鎮圧せんとする官憲及軍隊の行動を、民衆に対する不当攻撃なりと做すが如き、悪質なる思想的傾向」も見られた、と指摘している（『社会問題資料叢書』一、東洋文化社、一九七四年）。

（「歴史学事典4」（96吉川弘文館）

モラル・エコノミー（ヨーロッパの）
［英］moral economy

18世紀イギリスで多発した食糧暴動の研究のなかから生まれた歴史分析の新しい概念的用語である。この用語を最初に用いて食糧暴動の下に横たわる社会的正義の理念・民衆意識を分析したのは，イギリスの歴史家エドワード・P．トムスン（Edward Palmer Thompson）である。彼はまず『イギリス労働者階級の形成』（1963年初版）において，食糧暴動の分析の際に端緒的にこの用語を用い，食糧暴動は自然発生的に見えるが，「暴動」という呼称が示唆するよりもかなり洗練された民衆運動であり，「民衆の生活必需品の取引で暴利をむさぼり，食糧価格をつり上げるという不正なやり方を不道徳と教える，伝統的なモラル・エコノミーの考え方によって正当とみなされた」と述べ，それを「自由市場経済に対峙する伝統的な家父長主義的モラル・エコノミー」と表現した。

トムスンのモラル・エコノミー論をまずみよう。穀物価格の高騰，生活困窮，飢餓は食糧暴動の前提ではあるが，それが直ちに騒擾を引き起こすというのは「粗雑な経済決定論」に過ぎず，民衆が行動を起こす場合には，彼らのもつ慣習・慣行，文化，理性がその間に介在する。穀物価格の騰貴に起因する民衆の経済的不満は，市場取引，製粉，製パンなどに関して何が合法的慣行であり，何が非合法的慣行であるかについての，民衆の合意の範囲内で発動するものである。それはコミュニティの構成員の間で広く合意を得ている伝統的な権利や慣行ないし社会的規範や義務を守る，という一貫した伝統的な考え方，すなわちモラル・エコノミーに基づいた行動である。

かくしてモラル・エコノミーは，食糧暴動を「ある種の正当な行為とみなす観念」あるいは理念，ということになる。また moral economy という用語は，経済近代化推進の主潮流となった新しい経済学 political economy の開拓者アダム・スミス（Adam Smith）が，穀物の欠乏のときでさえも自由取引・自由経済を主張したことに対峙させ，伝統的な慣行，コミュニティの合意や規範を守るモラルとして用いられたものである。ここでトムスンはスミスの経済学を「不道徳」と言っているのではなく，新経済学は経済に「道徳」が入り込むのを排除した，ないし経済学にとって「道徳」を無関係なものにした，という観点に立っている。

トムスンが提起したモラル・エコノミーは，民衆には生存に不可欠な食糧を公正な価格で買う権利が，商人には公正な価格で売る義務があり，それゆえ商人，パン屋，農業経営者による買い占め，隠匿，目方のごまかし，市場に出さずに取引・横流し，あるいは外国や遠隔地に輸出・搬出する行為は厳しく糾弾されるべきであり，商人などが公正な価格で売らない場合には民衆の力で公正な価格で販売する行動を正当とみなす，民衆の生得の社会的正義を求める理念と言えるものであった。こうしてモラル・エコノミーは，共同体とその住民たちが正当なこととして歴史的に伝承した生活の規範ないし合意に基づくものであり，庶民の骨肉となり意識の深層に定着して民衆の固有の文化（民衆文化）を形成していて，新しい外から押し寄せる優勢な文化や趨勢（たとえば資本主義の発展に伴う市場経済，自由放任主義，富裕者・政治権力者・治安当局による支配・統制の論理）に対峙しつつ，民衆運動を支えた理念ととらえることができる。この用語が学界の関心を集めているのは，それが食糧暴動にとどまらず，地域コミュニティが外からの優勢な「近代的」変革の嵐にさらされた，資本主義的近代的秩序が最終的に確立する以前の段階における民衆（群衆）運動を分析するキーワードになりうる，と考えられたからである。

（鶴巻孝雄「近代化と伝統的民衆世界」92東大出版）

時代の社会的価値が、経済的自由の原理へ大きく転換しつつあるなか、慣習的権利（回帰主義）、道徳主義、公的タテマエなどに依拠しつつ、経済的自由の原理に制限を加えようとする要求・運動は、青森県士族の建白にもみられたが、「斉一」「均一」「平均」の観念と結びついていた。このような観念は、小作料制限建白のなかにも、[13] また困民党事件のなかにも表われていた。

一八八三（明治一六）年一二月の群馬県西群馬郡の負債騒擾（困民党事件）では、「生産会社」の行為は「世界困難ノ基」であり、「世界平均ノタメ取片付」するとして民衆の結集が呼びかけられた（「京目村など七か村宛集会回状」『群馬県史』資料編20・近現代4、二七三ページ）。翌一八八四年一〇～一一月の秩父事件でも、蜂起は「富者ヲ斃シ貧者ヲ救助」するためで、民衆に敵対的な「高利貸ヲ打殺」すことこそが「世直シヨスル」と受けとられており、「高利貸ヤ銀行ヲ潰シ、平ラノ世ニスル」から参加しろと、各家々を回るオルグが活躍していた（柴岡熊吉・小菅万吉・小板橋貞吉・黒沢金四郎らの「調書」、井上幸治・色川大吉・山田昭次編『秩父事件史料集成』第一～三巻、二玄社）。

このように、民衆の生活と労働の維持（回復）を求めて、民衆に敵対的で横暴な、〝自由〟〝所有〟〝契約〟などに制限を加えようとする立場は、民衆みずから〝世直し〟〝世均し〟〝均一〟と意識したが、制限要求や〝世均し〟に仮託された民衆の願い（社会的願望）を、井上幸治氏の『秩父事件――自由民権期の農民蜂起』（一九六八年、中公新書）によって、〝社会的平等主義〟と呼んでおきたい。そして、この社会的平等主義は、資本主義形成期の経済的自由の原理（自由放任的な経済的・社会的原理）に制限を加えようとするもので、それも伝統的な経済規制、あるいは社会関係を、生存権の優位を背景に慣習的権利として回復しようとするものであり、資本主義の展開に対抗的だった。

⑥ 「社会主義などの如き危険思想の煽動などは更になく……政治屋は今回は関係なし」と大養がいうように、この騒動は〝非政治〟的なものだった。吉河光貞も、「デモクラシー」思潮横溢の裡に在り乍らも、為政者の措置宜しからず」というのみで「反国体的乃至反国家的思想の片鱗すら之を発見し得」ない「低級なる道義的社会感情を基礎」にしていたと分析している（「所謂米騒動事件の研究」）。だが、それゆえにこそ米騒動は、世直し一揆と同様に「政事」への根底的な異議申立て、「政府の一時的否認」（三浦鐵太郎）となったのだ。従来から細々と続けられていた労働・農民運動、部落解放運動、普選運動などが、その政治的・社会的存在の態様やイデオロギー的差異をこえて、これを機に一挙に活性化したのも、こうした非政治性に内包された根源的な政治性のゆえであった。

⑦ 労働者は資本家と同じ国民ちやないのか……。一つ労働組合で吉を合して、大きな声を挙げて叫ばうではないか。……この失業をどう解決するとね、国家に聴くのさ。お役人衆に……叩頭をして廻るのは資本家のすることだ。腹はへつても労働者だ。解決策も国家に詰る可きだ。国家が解決出来なければ国家は滅亡しなければならぬ。決して国家は黙つては居ないだらう。

（日本労働総同盟友愛会機関誌『労働』一九二〇・七）

資本主義とは「人間を狡猾に正義も道徳も無視して、自個主義一点張に金の為め吸々として、何等他人を顧みない、言はば非人道主義制度」（友愛会神戸連合会『労働者新聞』一九二一・九・八）だが、失業という「国民」の難儀を「国家」が黙って見過ごすはずはない、というわけだ。私利の追求という「悪」のイメージ、「国家に聴く」という形でしめされる〝おかみ〟への期待等、米騒動に噴出した民衆の徳義と仁政の観念が労働運動にも脈々と流れていたのだ。ところが、争議になると意外にも警察は不徳なる経営者の側にたつて労働者を弾圧した。「我々は今横浜船渠会社と戦つてゐる。資本家の頑迷と貪欲は今に初めぬことだが、警察の横暴は一体どうしたのだ……何だか知らぬが我々はまるで国家と政府を向ふに廻して戦つてゐるやうな気がする」（『前衛』一九二二・四）。

⑧ だが、米騒動は選挙権拡大と社会政策採用の契機となり、結果として挙国一致の制度的前提を創り出した。これは国家が仁政の担い手として、さらには社会的対立の仲裁者としてふたたび登場したことを意味する。図式的に示せば、仁政観念と客分が結合していた近世、客分でありながら仁政が否定された近代前期、仁政が公認され民衆が客分でなくなった近代後期、ということになろうか。制度的にはもはや客分意識のはびこる余地はほとんどなくなった。とはいえ、納税・教育・兵役を「国民の義務」と受けとめてきた多くの民衆にとっては、あらたに「投票の義務」が加わったにすぎなかった。しかも、仁政の〝期待される権力〟像は、日常的には私利の追求を放任しながら、苦境におちいったときには強権を発揮して「弱者たる自分たち」を守ってくれる〝強い〟権力である。矜持をなくした客分意識や仁政観念とファシズムの親和性は否定できない。

⑨ こうした歴史の転換期に、「仁政」を要求する民衆が大規模な実力行使に出たのが米騒動だった。だからこそ困民党事件とは逆に、政治＝経済システムの基本的修正の引き金になった。ここに、近世末期や近代国家成立期とは歴史的位相を異にする米騒動の歴史的特質があった。ただし、第一次大戦後の社会政策は単なる仁政の復活ではなかった。治者―被治者の分離という仁政観念の制度的前提がなくなったからだ。為政者の裁量に左右される「人治」ではなく「法治」としての仁政である。〈仁政の制度化〉といってもよい。そうして一九二〇年代には、「はじめに」でふれたように、「国民」を冠した法律がつぎつぎに出されていく。ファシズムは民衆の「国民」化とその「保護」なしには実現不可能だったのである。

〈＊2′〉続き

（安丸良夫「困民党の意識過程」84「思想」）

秩父事件（明治十七年十一月）は、軍事組織による蜂起という形態をとっていること、自由民権運動とのかかわりが重要な意味をもつことなどのため、武相困民党事件よりも性格が複雑で、研究者のあいだでその基本的性格について大きな見解の相違がある。このうちもっとも有力な見解は、秩父事件を自由民権運動の発展線上に位置づけ、自由民権運動のなかでは政治的な内容をもっていた自由・権利の思想が、秩父事件のなかでは社会的自由民権へと発展して、社会的平等主義とでも呼ぶべき内実のものとなったとする見解であろう。いうまでもなく、これは名著『秩父事件』における井上幸治氏の説だが(12)、色川氏も『自由民権』その他の著作でこの井上説を踏襲している。だが、私にはこの説は逆立しているように思える。というのは、秩父事件はまずなによりも負債返弁騒擾だったのであり、それが激化するさいにその激化にふさわしい解放幻想として自由党＝板垣公の世直しを呼びよせ、特殊な突出した内容をもったのだと考えるからである。私は、このように考えることで、秩父事件が負債返弁騒擾というその時代の民衆運動のより一般的性格をふまえながらも、それだけでは割りきれない特別の意味をもったことを捉えてゆけると思う。

〈＊9〉

（福田徳三「極窮権の実行」（「中央公論」大正13年9月）

此度の騒擾は必竟するに、極窮權（ライト・オブ・エキストリーム・ニード）Right of extreme need の實行に外ならぬのである。政治家共が政權の爭奪を以て政治の一切萬事なりとして、有頂天になつて居るのみで、政治とは必竟民の生存を保障し安全にするを第一とすることを、全然忘却したに對する人民自衛權の發現と目す可きものである。舊幕時代にも屢々あつた、歐洲にも此先例はイクラもある。必竟人民は大抵な惡政治には我慢もし辛抱もするが、其が國民生存權の尊重を餘りに閑却するときは、極窮權の實行てふ變態を取つて現はれて來るのである。官僚政治の民本主義のと空なる文字を列べて政治の能事としつゝある間に、我國民の生存は極端に脅かされた。而して最も多く苦痛を感ずるものは、河上博士の所謂貧乏線の近所に彷徨して居る人々である。其が米價の奔騰の爲めに極窮點（ポイント・オブ・エキストリーム・ニード）に押し落された。此處まで落れば窮て而して通ずで、今迄は金持樣、自分等貧民は貧民で其々別天地に住つてでも居るやうな扱を受けても、大して不平を鳴らさず其が當然な事の如くに考へて居た連中も到底堪まらなくなつて、生存權の主張者となつて現はれるが、其の主張は尋常一樣では駄目であるから、ソコデ一の變態たる極窮權の實行を以て先づ着手するので、コレハ殆んど一の自然法則の働きと云つても言ひ位當り前の事である。

〈＊10〉

「彼等は彼等じゃなかった。

彼等はさらに他の彼等に巧みに掩いかぶせられた幾重もの殻に包まれていた。そして彼等は、その中身の彼等自身をあるいは他人だと考えさせられ、あるいはまたその存在をすら忘れさせられてただその上っ面の殻だけを彼等自身だと思い込まされていた。

Wah! Wah! Wah!
Bara-Bara! Gara-Gara! Doshin!
Wah! Wah! Wah!
叫喚、怒号、○○、○○、○○、

いま、彼等は彼等だ。中身だけの彼等だ。

彼らにはもう教えられた何ものもない。強いられた何ものもない。瞞しこまれた何ものもない。すべてを彼等自身の眼で見る。彼等自身の心と頭とで審く。彼等自身の腕で行う。彼等自身の魂を爆発させる。（中略）

彼等はまた旧の彼等に帰るだろう。彼等自身じゃない彼等に帰るだろう。そして再びまた彼等自身を忘れてしまうだろう。

短い酔だ。しかし、彼等が彼等自身に帰ったこの酔い心地だけは……」

（『文芸論集』「大杉栄全集」第5巻、現代思潮社、一九六四年）

2008年12月21日　「米騒動」から何を受け取るか　そして、その〈先〉へ

埴野　謙二

11 月には、平井さんは大きい見取り図を描いてくださり、山口さんは「麻生邸リアリティツアー」のことも含めて、話してくださいました。

けれども僕の方は、なんとなく短い時間の中で慌てて何かを言ったという感じ以上のなにものでもなく、収まりが悪い感じがずっと残りました。もう少し現在まで引っ張ってくるところの話がないとあまり意味がないと思っていたところがあるので、そこのところは付け足して、この後来年の 1 月、2 月、3 月にやりたい事につなげていけるようにしたいなと思いました。それが、今日こんなふうに時間を取ってもらった理由の一つです。

もう一つは、平井さんと山口さんの話に僕の話も付け加えて、それをみんなで聞く、ということで、僕・たちの「米騒動 90 年」が終わってしまうのか、終わっていいのかという自問自答がありました。富山のきわめてローカルな話題として「米騒動」を考えるということだけは突破したいと思った、ということはもちろんあるわけですが。単に言説の上で突破してもしようがないのだけれども、「米騒動 90 年」をなにか話をきいたことで終わりにしてしまうわけにはいかないな、というそういう気分が僕の中にはあって、その気分をちゃんと表現しなければいけないなあという感じが強くて、そのことも今日こんなふうに時間をとってもらった理由になります。

11 月に一回やったことをまた続けてやるというのは芸のある話ではないので、はかばかしくつなげていかれるかなとも思うのですが、少しだけ言い残していることを言います。もう 1 ヶ月も前の話だから覚えておられないかもしれません。僕の方もよくわかってもらえるように話せたわけでは決してないし、話していることのなかみ自体も乱暴な話し方をしているところがあったので、あんまり通じていないところもあるのかなという気がしています。今それを一つひとつさかのぼって話すのも、また同じ時間を使うことになるので、もし、前回のことでこのことだけはよくわからないので聴いておきたいということがあれば、後で言ってもらったらいいと思います。

補註としてつけた末尾の図にそって、見ていってもらいたいと思います。明治期末から大正期の 30 年近い時間の流れを、このような平面図形で表すということは、ある意味ナンセンスだし、時間の流れというものをこういう形で表せるわけがない。だからといって、これを一つひとつ言葉で言っていたら膨大な時間がかかるので、なんとかしてかたちに表せないものかと思ったのです。どうしてこれが三角形なのかという問題もあるのですが、こういう形を作ってみて、それでどこまで説明できるかやってみようと思いました。

三角形の意味とか、頂点Ａ，Ｂ，Ｃ、点Ｏ，Ｐ，Ｑとか線分$\overline{\mathrm{AQ}}$と$\overline{\mathrm{AO}}$とか・・・それらが幾何学的にどういう意味があるのかと思ってもらったら、これはちょっと違うんで、単なるそういう図形を使っているだけのことなのだと思ってください。それでもなお、わかりにくいことがあるかもしれないのですが、むりやりそこのところを図形の意味にとらわれずに見てもらいたいというのが、僕の方ののぞみです。いろんな他の場所をパズルのピースのようにして埋めていってみて、最後に残るところが「米騒動」だ、そういう発想で「『米騒動』の場所」を確定してみたい。そういうやり方じたいも、ある意味問題だといえば問題なんだと思いますが、とりあえず、そういうことを前提にして（40 ページの）**「図・４」**をみてください。

i「米騒動」の場所・再論

この前も話しましたが、三角形BPOが「伝統的な民衆運動のあり方」を指しています。これは、基本的には近世、幕藩体制下の近世の日本社会における民衆運動、「百姓一揆」であるとか「世直し一揆」であるとか、そういう形で現実的にあったものをある程度抽象化して考えてみました。それは、明治期の初めまで続いています。いわゆる「秩父事件」――1884 年（明治 17 年）10 月 31 日から 11 月 9 日にかけて、埼玉県秩父郡の農民が政府に対して起こした武装蜂起――が、「伝統的民衆運動」の最後の輝きといっていいのではないかと思います。それがどういう性格を持っていたのかということは、大正期の「米騒動」を理解するうえでとても大事だし、「米騒動」にかぎらず、今現在僕らが生きている 2008 年というこの時間の中でも、「伝統的民衆運動」がもっていたありようというものが、まだまだ組み尽くされていない可能性をもっていると、僕は感じています。

「伝統的民衆運動」の一番のポイントは、この「図・4」でいうと線分$\overline{\mathrm{BO}}$です。B①と書いたところです。これは、「時の権力」に対して「徳義ある経世済民」の要求を表しています。「徳義ある経世済民」というのは、「モラルエコノミー」という言葉を勝手に日本語に直したものにすぎません。資本主義というものが、ある種典型的に成立してくる、たとえばイギリス、フランス、ドイツ、・・・等の国々では、多かれ少なかれ、18 世紀前後に「食糧暴動」があるのですね。そういうところで民衆たちがとった行動というものを、「食糧暴動」というふうに後世名付けています。「暴動」というと非常に無秩序でアナーキーな感じを受けますが、「食糧暴動」というものは、けっこう民衆文化に根ざした、ある種のルールがあったようなのです。

民衆の側からの「時の権力」に対する要求行動。「米騒動」というのは全世界的にみても、ヨーロッパの近世期を通じてあった「食糧暴動」と共通性をもっています。だいたいヨーロッパだったら、小麦（米と違うけれども、同じようなものと考えれば）。それを扱っている悪徳商人がいて、不作であろうと何であろうと地主とかが取り立てたものをどこかに集めて、それをいろんな所へもっていって商売をしている。そのようにして「食糧の価格決定」が行われるということです。

「相場」というのは、もちろん商品経済の中で進行していることだから、市場によって決まるのだろうけれども、それが民衆にとって妥当か妥当ではないか、という感覚を民衆

がもっている。たとえば、今A円で売られているけれども（A－2）円じゃないか、と。「おれたちは、この値段で米を買うのが妥当だと思う」というふうにして、悪徳商人からださせる。そういうときの、民衆の共同の価値観みたいなものを「民衆の価格決定」という言葉で、研究者が説明しています。みなさんの中にも、思い出す人がいるかもしれません。イタリアの「アウトノミア運動」の中でスーパーへ行って万引きして、その時に「自主的価格決定」とか言っていましたね。そういうものと共通性があると思います。資本主義の商品経済の広がりの中でのありようを探る学問を「ポリティカルエコノミー」とよんでいますが、それに対して「モラルエコノミー」を対置する。商売というものは、あくまで「徳義」というものに基づくべきなのではないか。それに反するような悪徳商人は、懲らしめてやらなきゃいけない、というわけです。

ただ、この列島における「打ち毀し」の時にも、ある種のルールがあったようです。米以外のものには絶対手を付けないとか、米屋に悪徳的に貯蔵されている米を往来にぶちまけるとか、それをとって逃げるということはお互いにしてはならないとか、いわんや、他の家の財産みたいなものには、いっさい切手を付けないとか・・・・。読んだことがある、という人もいるかもしれませんが、北方謙三の「余燼（よじん）」という小説があります。「天明の打ち毀し」をモデルにして、きわめて意図的に「米騒動」を起こす話です。そこでも、そういうルールはちゃんと守られているように描かれています。

僕・らが今これから迎える 2009 年とか、2010 年は、非常に大きな波乱がやってくるように想定されています。そういうときにこそ「モラルエコノミー」という発想は、僕・らの側に必要なのではないかと思います。「モラルエコノミー」は近世期の「伝統的民衆運動」としてもう終わったんだ、という話では決してないのではないかと思います。「米騒動」が「伝統的民衆運動」に根をおいた一つの民衆の騒乱であったというそこに、魅力というかおもしろさがあると思います。

大正期には、いいも悪いも「大正デモクラシー」とよばれている、民衆の側の「普通選挙」を求める運動とか、いろんな女性の運動、「部落」解放の運動とか、いろんなものが広がってゆく。「米騒動」がそういったいろんな運動の背中を押したということは、一方ではまちがいないことだと思う。富山なんかでは、「米騒動」を、「大正デモクラシー」を導いた営みだったんだと位置付けたがっていますが、僕は、「米騒動」は「大正デモクラシー」よりもずっと過激だった、と思うところがあります。

また、大正期は、大阪とか東京都とか名古屋という大都市が、「都市」のありようをだんだんと明確にしていく時期でもあります。それと関連して、「新中間層」にあたるような人たちが出現してくる。いわゆる「都市」のあり方をめぐる「都市社会運動」が、けっこう大都市では起こるわけです。

少しさかのぼりますが、日清、日露というかたちで、日本の民衆がきわめて意図的に自分たちもまたそれに乗って、というか、（先ほどの三角形の図で、「絶えざる国民化」を生きている「国民」を頂点Aで表したのですが）きわめて「国民」的な意識が旺盛になって、二つの戦争を戦う。とりわけ日露戦争というのは、ロシア軍と日本軍の「死者」というのが膨大な数なんですね。もちろん第一次世界大戦には匹敵しないけれども、それでもかなり「死者」をだすすさまじい戦いだった。そこで、「日本国家」を背負って兵士として戦

ったたくさんの人たちがいたわけです。それはそれで、「国民」たらしめられてきた成果です。そういうふうにして、自分ちの男の誰かが戦争に行って死んだとか、隣りの家の誰々が死んだとかいうようなことが無数にある。そういう自分の身近な男たちが死んだことの代償としての日露戦争後の「講和条約」が、「あんなもんでたまるか！」ということとして、「日比谷焼き打ち事件」があった。そういう意味では、「国民」というものが、それなりのいい悪いとは別に結果を生んだことの一つの側面が「講和条約」反対の運動だったわけで、新聞社や政府機関を襲った、これは一種の暴動に近いものでした。その後、「憲政の常道をまもれ」という、藩閥政治に対する「国民主義」批判というのがあって、「憲政擁護」の運動が、とりわけ大正期に入って「都市」を中心に起こりました。

東京市では、市営の電車賃が上がることに対して反対運動。これも電車を焼き打ちにしたり、けっこう激しい都市暴動になりました。この時期を「都市騒擾期」と名付ける歴史研究者がいます。その最後が「米騒動」なんですね。

「米騒動」の担い手は、「雑民（ざつみん）」だ、と平井さんはまさしく言いました。日本の資本主義を、明治以後国家の手で育成しますが、（平井さんが言っていた「本源的蓄積」）、「本源的蓄積」をやればそれで労働者が集まってＯＫというふうでは必ずしもなくて、後発資本主義国であればあるほど、継続的に「労働者」を仕立て上げなければならない。日本の中にも、幕末からずっといろんな職業があったわけですが、いわゆる近代的工場労働者がある層を成して存在してくるまでに時間がかかる。都市の「下層」社会民と近代的工場労働者になっていく層が分離できないで重なっている時期がある。それが、日露戦争、大正期に入り第一次世界大戦・・・というふうになってくると、少しずつ近代的工場労働者という層が都市「下層」社会民から分離していくわけです。それがまだ連続性を持っている、ちょうど最後の局面に近いようなときに、「米騒動」が起こる。そこに平井さんの言う「雑民」というようなものの実態があるんだと思います。「大正デモクラシー」の時代に入ると、もう完全に、近代的工場労働者層が都市「下層」社会民から離脱しているわけです。ですから、「米騒動」というものが、まさにその分岐点にあたるんですね。

大正期の「第一次世界大戦」―「ロシア革命」―「米騒動」・・・というふうなその過程が、いわゆる近代的工場労働者層が労働者階級として「階級」形成をとげていく過程でもある。1918 年、19 年、20 年という時期は、近代的工場労働者たちが、労働組合をどんどん結成していって、争議の数もすごく増えます。だいたいここで日本の資本主義が独占資本主義の段階に入り、同時に労働者も労働者なりの階級形成をとげる、そういう段階に入っていく、「大正デモクラシー」の時代に。ただ、そういう労働運動が初期の段階は、「友愛会」という名前で名づけられるような団体があるヘゲモニーを握っていました。「友愛会」というのは明治の終わりからあるんだけど、「友愛」という言葉からもわかるように労使の親睦機関です、最初は。「協調会」というのがまた別に御用機関のように作られるのは、第一次世界大戦が終わってすぐです。「友愛会」は労働組合ではなくて、労働者の親睦機関のようなものから始まって、それがだんだん組合らしくなってくるのが、ロシア革命の余波の中でのことです。そのようにして日本の中でも近代的工場労働者が都市「下層」社会から離脱する、そのことを受け止めながら「友愛会」がだんだん過激になっていく。だいたい 1917 年～ 1920 年あたりが争議としても組合の結成数にしてもピークになっ

ているような時期です。

「米騒動」が、そういうものも含めて「大正デモクラシー」と一括してよばれるものをひらいた、後押ししたと言ってもいいとは思いますが、ただそう言うと、あまりおもしろくないという感じが一方であります。

ii「米騒動」がひらいたもの

大正期には本当にいろんな運動がいろんなふうに始まっていく。そして、それに接していわゆる「アナボル論争」というのがあって、ロシア革命後にボルシェビズムとアナーキズムの間の論争が日本でもあって、論争としてはボルシェビズムが勝ったとされている。それ以後については、去年の末から今年の初めにかけて長い時間をとってしゃべらせてもらった、僕なんかの個人史も含めた〈６８〉年について話したときの最初に、社会運動の「古典的な範型」というような話をしたと思います。1922 年に日本共産党が結成されるのですが、その「古典的な範型」が日本で創出されるのが、だいたい大正期の終わりです。大正期の終わりの方で、日本の社会運動は「古典的な範型」に入っていくわけです。

「米騒動」から大正期の終わりくらいまでのところは、いろんな運動が繰り広げられて何が中心だというようなことがないような時代がほんのわずかだけどあります。「古典的な範型」になってくると、「前衛党」があって「労働者本隊論」があってというふうな図式になってきて、労働運動が全ての運動を統括しているという運動のヒエラルキーができるのですが、そこまでの時期というのは多種多様なものがバーッと横に並んでいてめちゃくちゃいろんなものがあるというか、そういう大変おもしろい時期です。「米騒動」がひらいたものは、そういう社会諸運動が「古典的な範型」に行き着く前の〈混乱期〉を生んだというか、そこの方に価値があると思います。それも含めて「大正デモクラシー」といえばそうだと言えないこともないんだけれども。いろんな社会運動が、それぞれの間に価値の序列がなくて、みんな銘々わいわいやっているという、そのことの良さというのが「アナボル論争」以前にはありました。ほんの短い時間です。そのときの労働運動を支えた思想を、「アナルコサンジカリズム」と言っています。「サンジカリズム」というのは「労働組合主義」みたいなもの。「サンジカ」というのは「労働組合」のことですから、それに「アナルコ」というのは「アナーキーな」ということで、結局簡単に言えば、アナルコサンジカリズムというのは、「政治」を否定しているわけですね。つまり、労働者の経済闘争が政治を変える、それが基本的な筋道だ。最大の武器は「ジェネラルストライキ」である、という。つまり、「政治」という領域を別に立てることを否定する。だから、「アナルコサンジカリズム」を担いでいた労働組合は、普通選挙運動なんかについても否定的なんです。むしろ、「アナルコサンジカリズム」からすると、普通選挙運動というのは労働者を体制内化するための有力な「装置」じゃないかというのが批判点なんで、今でもそう思うし、それはそれで妥当なことだったと思います。

ほんのわずか、ほんの数年の間日本の労働運動に影響を及ぼしたものに過ぎなかったわけですが、それでも、大杉栄を初めとしたアナーキストたちが、最も日本の現実の運動に近づいた時期でもありました。大杉栄が関東大震災で「虐殺」されなかったら、日本の労

働運動というのはどうなっていただろうと想像すると、大変おもしろい気がしますが。しかし敵も然る者で、甘粕という憲兵大尉だった者が、あれはほとんど自発的にオリジナルな自分の発想で大杉栄を「虐殺」するわけです。誰かから命じられたわけでは決してなくて、だけどこれがこのまま進んだら日本の危機だということを、甘粕は特有の皮膚感覚でおそらく感じたんだろうと思う。大杉栄がもし死ななかったらどうなってただろう、と空想してみると大変おもしろいです。ほんのわずかな期間ですが、そういう時期がありました。

「米騒動」は、そういう「大正デモクラシー」を後押ししてひらいていきます。それは同時に、今言った、労働者が労働者階級としての階級形成を遂げていく過程でもあったわけで、そういうなかで「古典的範型」にそれが集約されていきますが、それとちょうど相呼応しながら、その動きを見ながら、支配の側は決して手を抜いていたわけではもちろんなくて、これは日本の大きな危機だ、ということを感じていたんですね。

「米騒動」で大事なのは、日本の支配層がすごく恐怖した、ということです、「米騒動」自体に。つまり、どんなに制限された選挙法であったにせよ、明治憲法の下で帝国議会があり、もちろんその上に元老院とかいうのがあったり、それから天皇が、今の天皇とは大変違う政治的機能をもっていた。そういう時代が明治期からつくり出されていって、日露戦争に「勝利」して、と思ったその矢先に、日本において「社会」という次元が否でも応でも浮上してくる。資本主義というのは後発資本主義であるとはいえ、それが「日本社会」というものを形成する、「国家の力」とは相対的に区別される「資本主義の力」というものが回転し始めてくるわけです。「社会」というものがどうしても浮上してくる。石川啄木の「時代閉塞の現状」という有名な文章がありますが、要するに日露戦争後というのは、それまで一生懸命「国民」になれ「国民」になれと全てを挙げて「国民」化させていく動きが進められてきますが、日露戦争は「勝利」したものの「国民」を本当に納得させる「勝利」ではなかったということが、逆に国家というものが人を縛る縛り方において緩んでしまうという時期が明治の末にあるわけです。

有名な「戊申詔書」というのがありますが、明治の何年かに出るんですよ。歴代出された詔書の中で最もなんだか意味がわからなかった「詔書」と言われています。要するに、日本国家の人を「国民」化させる力がどうしても緩んでしまう。「社会」というものが露出してくる。そのことで支配層の側が、危機感を持ち始めたということです。いわゆる「大逆事件」というのが、まさにその象徴なわけです。要するに日本の支配層が、国家というものが、一元的に人を支配しきれず「社会」というものが浮上してくる。それで「社会」と国家の隙間をどうすればいいのか、ということを日本の支配層は一番考えざるを得ないことになる。その隙間に、「アナーキズム」などという国家を転覆させる思想が流入してくる。「日本社会」がそれを受け容れる、それなりの基盤ができてくることに対する恐怖感が、極めて大きいものだったんだろうと思います、支配層にとっては。

なんとかそういうところを抑え込んで大正期に入りますが、ご存知のように、大正天皇というのは明治天皇のようにカリスマ性をもっていなかった。カリスマとしての天皇の価値というものはほとんどそこでは発揮できない。しかも藩閥政治をそのまま継続していくことが難しくなってくる。山縣有朋なんかは一番そういう「社会主義」勢力が浸透するこ

とをいつでも気にしていた人だ、というふうに言われています。そういう意味で「米騒動」というのは、どんなに限られた制限選挙法であったにせよ民衆が自分の意思を表す回路として想定されているなかで、そういう回路とは全く別のところで民衆の意志が表現されるということが、どこまでいくんだろうという恐怖感が極めて大きいものだった。「大正デモクラシーの後押し」をしたというよりも、日本の伝統的な支配層に、すごく大きな恐怖感を与えたということの方が、僕は「米騒動」としては大きいのではないかと思います。そういうことがあったわけですね。だから寺内内閣が辞職して、原敬の下で最初の政党内閣というものが組織化されていく。その中で近代的工場労働者がいわゆる都市の「下層」社会から離陸していって、労働者階級としての階級形成を成し遂げていく。

一番それを敏感に、どうしたらいいかと感じてたというのは内務省の若手の官僚たちだった。当時内務省というのは日本の行政機構の中では、他の行政機構を押さえたようなてっぺんにある、国内の全てのことを握っているような、そういう行政機関だった。その内務省がその当時、さっき言った国家という枠組みが緩んでいく、そのことに対して何とかしようということで、一方で明治から大正の頃にかけて「地方改良運動」とかいうようなものを国家の側から進めていく。地方ごとに、要するに言ってしまえば「村おこし」みたいなことなんだろうけど、自分の地方でどういうものを名産にして、どういうふうにすればその地方の住民が豊かになれるかというようなことを競わせるという、上から作った官製運動ですけど、一方でそういうものを進める官僚グループもあったわけです。

それに対して、もう少し新しい新進の官僚、前にもちょっと話したと思いますけど、南原繁という、後に東大総長をやった人が、ああいう時代では学生が大学を卒業すると、今でもキャリアというのはみんなそんな形をとるのでしょうが、当時はいろんな市町村郡の郡長になる、射水郡長になるんです、南原繁という人は。そこで何年かすると、また本省へ戻される。そういう人たちが、ヨーロッパにおける労働運動が盛んになってくる経緯とかをよく勉強しているわけです。その人たちが一番気にしている、日本の場合どういうふうに階級対立を案配したら階級対立が激化しないで、その敵対性をどうしたら転換できるかを、大真面目に考えるんです。当時の日本の支配層が、どういうふうに民衆を「統治」するかということについて、わりとまとまったプログラムを持とうとしていたのは、その内務省の官僚たちだったわけです。その中心が、「労使協調」へむけて「労使」をちゃんと土俵に乗せていこうとする。勝手にわいわい騒がれているのが一番まずいわけで、「労使協調」のためのいろんなシステムをつくっていく。それと同時に、いわゆる「社会保障」・「社会福祉」にあたるものも、その時期から本格的にスタートする。いわゆる「社会的なもの」がそこで形成され始めるわけです。ですから、労働者階級の方を同じ土俵になるべく乗せる。古いタイプの日本の民衆支配の方式だと、「叩け」ということしか出てこないんだけど、その新しい官僚たちというのは、要するに「土俵に乗せちゃえ」ということなんです。まさに「社会的なもの」の成立になっていくわけで、いわゆる「社会政策」にあたるものがいろいろと考えられていって、「国民健康保険」の前身にあたるような「国民」という範囲までには広がっていませんけれど、今の厚生保険、労働者を対象とする保険ですが、そういうものをつくることが進められていく。しかしおもしろいことに、「労働組合法」というのはついに成立しない、日本の場合。かなりいろんなプランが当時出されるんだけれど、

結局それは成立しない。普通選挙法と治安維持法とを抱き合わせる形で、「民衆」を統治するスタンスを作るということになったわけです。

そういう意味では、伝統的な天皇制国家の民衆支配の方式がそこで転換をする。全面的な転換ではないけれど、一つの転換をする。いわゆる「社会保障」・「社会福祉」とか言ってることです。「社会福祉」の方で言えば、「社会事業」という言葉がその頃やっと日本に定着します。それまでは慈善事業的なニュアンスで、その言葉は使われてきていましたが。それから今の「生活保護」にあたるものは、「恤救規則」というものが明治の初めにできてそれがずーっと続いてきていましたが、昭和の初めに改訂されます。もう一つ、今の「民生委員」にあたるようなものとして「方面委員制度」というものが、その頃から各地に作られます。これも有名な話があって、宮中で地方の実態がどうなっているかという明治天皇の御下問があり、そこで「日本の下層民はどうなっているか」みたいなことを明治天皇が聞く。それに対して知事たちが応える場面があった。岡山の知事が、あまり自分もよくわかっていなかったらしく、慌てて帰っていろいろ調べたら結構、貧困というものの度合いや、累積しているありようが、その人にとっては驚異的なものだったようです。それをなんとかしようと、地方の「名望家」たちを集めてエリアを分担させて、自分のエリアの中にひどい状態に陥っている者がいないかどうかを絶えず調べろ、という手法を導入します。それを、「方面委員」というのです。同じ時期に、かなりいろいろな地域でもつくられていく。厳密な意味でいう、行政機関ではない民間の者が、いわば行政の手先になって民衆の貧困度みたいなものを絶えず観察する。それを誰かが「民衆の貧困の測候所なんだ。そういう役割なんだ。」と当時の言葉で言っています。そういう「社会保障」・「社会福祉」にあたる、つまり「福祉国家」と言われるものにあたるもののひな形みたいなものが、日本の場合においてもその時点で成立してくる。

これは有名です。1919 年の第一次世界大戦後、ドイツでワイマール憲法ができますが、これは当時世界で一番民主的な憲法と言われたもので、その中で市野川容孝さんがよく強調することですが、「社会国家」をめざすということが憲法の条文の中に入っています。むしろドイツでは、「福祉国家」を指す言葉として、「社会国家」という言い方をします。

労働運動の問題についても、「ILO」というのができるのが、やはり第一次世界大戦直後です。そういう意味で、世界的に労働運動というものをどう考えるかということが国際的な問題にもなっていて、さっき言った内務省の若い官僚たちが、その影響を受けているというようなこともありました。そういう意味では、現段階のグローバリゼーションとは違うけれども、ある種のグローバリゼーションが第一次世界大戦後、世界を覆います。この場合の中心は、帝国主義間戦争だった第一次世界大戦に発する帝国主義間の、いわば露骨な武力を含めた競争関係として、グローバリゼーションであるわけです。一方で「国際連盟」ができてくるように、現在につながる国際的な舞台が作られていくという意味では、それもまたグローバリゼーションの一つだったということだと思います。

iii「米騒動」から何を受けとるか

以上のように前回は、ほかのものを埋めていってそこにあるのが「米騒動」だというような、そういう割り出し方で「米騒動」というものを浮かびあがらせていくことをしたわけです。しかし、それではあまりおもしろくない、後知恵でやっているようなものですから。あとから歴史を振り返ってみて、「米騒動」はこういう場所を占めていたんだなっていうことがわかるというのは発見的ではなくておもしろくない。

それで、ちょっと変形してみようと思いました。末尾に、[補註・2]というのがあると思います。[(ⅳ)「米騒動」のスタイル]というところです。そこを見てください。これは、事後的に発見されてわかってくるという「場所」ではなくて、「米騒動」の「スタイル」みたいなものを、もっとストレートに取り出してみたほうがおもしろいのではないかという意味で考えたものです。点線でかこんであると思うけど、その点線の内側に、頭のところに黒い三角形がついているもの、これが「米騒動」のスタイルを占めるもので、そして矢印になって下のほうの黒い丸になっているところが、当時でいえば「大正デモクラシー」として一括できるような動きだと思ってください。それから図のＰのところ、これはこの前からよく使っている「極窮権」という考え方にもとづくもの。福田徳三という人が言った言葉ですが、簡単に言えば、「困窮極まれば人は何をしてもいいぞ」ということ。そういう考え方は、法律には何も書いてないけど、自然法的な感覚としてずっとあったんだということ。その人の書いた文章を読むと、さっきいった食糧暴動、背後にそれを想定しているなということがよくわかります。そういう食糧暴動なんかにあらわれてくる民衆のありようというものを、「極窮権の行使」とその人は呼んでいます。「極窮権」というのは「米騒動」のスタイルだとすれば、「大正デモクラシー」下では、「生存権」の要求というようにして言われる。「生存権」が侵されようとするとき、人は何をやってもいいんだというのが「極窮権」だとすれば、「生存権」をいうよりも「極窮権」を行使するほうがずっとラディカルなわけです。

そしてその右側に、平井さんのいう「雑民」層と近代的工場労働者との対置があるわけです。さっきも言ったように、大正期にまちがいなく日本の労働者は労働者階級として階級形成をとげる。そうなると逆に、労働者の闘争というのは定型化されていきます。労働組合の存在によって、自然発生的な運動ではなくなるわけですから。別に春闘を例にひかなくても、争議をするというやり方が、何らかの意味で定型化されていく。相手からすれば、相手にしやすくなってくる、そういうことになります。

そんなふうに対比していけばいろんなことが対比できるのですが、もう一つだけいいます。その三角形の$\overline{\mathrm{AQ}}$の上のところに、「『危険な階級』と労働者階級の分断」というのがあると思います。都市「雑民」層と近代的工場労働者とに連続性があったということ、そういう事態をヨーロッパのある学者が「『危険な階級』と労働者階級」という言い方をしました。「危険な階級」の危険というのは、だいたい犯罪から暴動までの巾をイメージしてもらったらいいと思います。「何をしでかすかわからない」というのが、労働者階級になってくると定型化されてくる。資本の側としては扱いやすいものになってくる。後の分け方で言えば、労働者階級というよりも、むしろルンペンプロレタリアート、それこそ「雑民」そのもの。「何をやらかすかわからんぞ」というありかたをする人間たちのことを、「危険な階級」というふうに言っています。

「米騒動」というのは日本的な「危険な階級」と労働者階級のまさに連続性の行動として起こっている。そして大正期の第一次世界大戦後、逆に「危険な階級」と労働者階級を分断して、労働者階級と資本家階級とを協調させる、それが「社会的なもの」の成立ということの意味だと思ったらいいわけです。だいたいこんなふうな対比関係で、「米騒動」のスタイルというものを考えたらいいのではないかと思います。

それを、もうちょっと抽象化して言いたい。「米騒動」というものを、そのものズバリで言うとしたらいったいどう言えばいいかということです。左下の方の[＊]のところを見てください。

平井さんの言葉を使えば「雑民蜂起」、それをちがった言葉で言ってみると、「国家の想定した秩序の回路を通らずに行動して、その枠を一時的にせよ全く踏み破った民衆の行為、行動」ということです。今のように、民衆が何かを言えるチャンネルがたくさんあるというわけではない。今なら形のうえだけは、いろんなものがあります、当時はひじょうにか細いマスコミュニケーションが、「米騒動」の伝播に果たした役割が大きかった。特に、「高岡新報」でしたか、あの新聞の果たした役割はけっこう大きなものだったと思います。当時は、新聞の購読率というのがようやく高まってきて、コミュニケーションの大きな回路になりかけていました。日露戦争後の「日比谷焼き打ち事件」のころには、新聞社というのは、そういった社会的なオピニオンを作っていくうえで大きな役割を果たす時代に入ってくるわけです。それにしても、民衆が自分の意志を表現する回路、そういうものが全くなかったわけではないでしょうけれど、ほとんどないに等しいところで起きているということ。想定されている回路がないわけではないけれど、そういうものを全く通らないところで行動を起こしていってその枠を一時的にせよ破ってしまったということ。そういうことが、「米騒動」の核心にあるのではないかと思います。

ちがった言い方で言うと、これも言い換えにすぎないですが、「大規模な媒介なき乱入」という言葉。これはどこからとってきたかというと、この間の韓国の「キャンドルデモ」。女子高生が呼びかけたら、アッという間に拡がって新大統領に牛肉の輸入政策の見直しを認めさせたというのがあったんです。それこそ、大規模な暴動ではないけれど、暴動にまではいかないにしても、大きな民衆の騒乱がありました。韓国の「研究空間スユ＋ノモ」という研究団にコ・ビョングォンという人がいて、その人の文章の中に、「大規模な媒介なき乱入」という言葉で触れられています。そのことを、さらに別の言葉で置き換えると、これはヨーロッパの社会史を研究している人の言葉で、フリーター労組の山口さんたちの試みにも通じる言葉ですが、「騒動による団体交渉」。それらの言葉に通じるものが「米騒動」の一番深いところにはある、というかあったと言っていいのではないかと思います。

そういうところに「米騒動」の一番の真価があったのではないかと思います。いま「現代の米騒動」と言われたり名前をつけられたりするのは、その核心に、いまふれたようなことがあるからだと思います。要するに「騒動による団体交渉」、つまり設定されている回路を通らないで、民衆がストレートに自分たちの意思を表現していく、そういうありよう、そこに「現代の米騒動」といわれる理由があると思います。まさに、90 年前の「米騒動」はこういうところにあった、ということは価値のあることです。そういう「雑民蜂起」というか、そういう暴動が起こってくる、それに対して支配層は大きな恐怖感を抱い

たのだと思いますが、その恐怖感にたって対処しようとすれば、敵対性の現れ方を変形させていかなければならない、そのことが一番やらなければいけないことと意識される。それが(＊＊)です。先ほど内務省官僚のことにふれて言っていたことを、もう少し抽象化したものです。支配層の恐怖というのは、秩序の根幹への異議申し立てがされているのでは、という恐怖感です。秩序の根幹への異議申し立てに対する恐怖。その秩序の根幹への異議申し立てを代弁したり、代表できるものに変える、あるいは社会問題を解決すればいいというように変える。それが、敵対性を転位させるということの中身です。支配層がいつでも恐れているのは、直接性なのです。「民衆の直接性」です。「民衆の意思表示の直接性」をいつでも恐れているので、それを「代表制」に押し込めたり、あるいは「社会政策」的なものや「社会保障」的なものを保障していけば、問題を解決できるというように転位させていく。そのふたつをやることができれば、秩序の根幹への直接的な異議申し立てというのは変換できる、ということです。ですから、そこに書いてあるように、普通選挙制度の導入と、「社会的なもの」の構成が、大正期の支配層の恐怖による敵対性の転位のさせ方です。だから、支配層をして敵対性を転位させざるをえないというところまで追いつめた、というのが「米騒動」の最大の価値だと思います。富山の「魚津の街おこし」にそういうものを使うのはもったいないというのはその通りで、そういう支配層の恐怖に直結するようなアクションがあったということが、僕・らにとって意味があるということではないかと思います。

ついでに言いますが、太平洋戦争の末期に近衛文麿という総理大臣がいました。彼らが何を恐れたかといえば、敗戦の際に「赤色革命」が起こるのではないかということです。「赤色革命」が起こるのでは、ということを近衛文麿も言っているわけです。そういう恐怖感というのが、支配層にはあった。どんな支配者であろうと、民衆の叛乱にあうという恐怖感はあると思うのですが、日本の支配層も、伝統的にそういう恐怖感を継承しているのです。何もないところで妄想的に恐怖感を感じているわけです。この前のフリーター全般労働組合の「リアリティツアー」ではないですが、こちらが〈妄想〉すれば支配層も妄想する。向こうの妄想に匹敵するくらいの〈妄想〉をこちらも持たなければならないし、〈妄想〉の競争は必要であり、〈妄想〉で勝たなきゃということがある。だから、「現代の米騒動」というように比喩として現代に持ってくることの核心にあるのは、支配層にどれだけ恐怖を与えることができるかという問題、支配層に恐怖を与えるというところに一番核心があるということだと思います。「『米騒動』の場所」というと、とてもつまらないのですが、そうではなく、それを「スタイル」と言い換えていく。何が「『米騒動』のスタイル」の核心にあったかというと、支配層に恐怖を与える。敵対性を転位せざるを得ないように意識させるところに追い詰める。そういうところにいちばん価値があったと思います。「場所」というとどうもつまらない話になるので、もう一度「スタイル」というかたちで言い換えた方がいいのではと思いなおして、これを付け加えたのです。

「『危険な階級』と労働者階級の分断というのは、支配層のやり方ではないか？三角になるのは、逆に『危険な階級』と労働者階級との連携とまではいかないが、連続性になるのではないか」ということが尋ねられましたが、そういう意味で「分断」というのは連続性が途切れるということです。だから日本の場合は、「危険な階級」と労働者階級とを分

断することと、労働者階級と資本家階級とが協調することが、ほとんど同時進行的に進んでいるようなものです。時間的には「危険な階級」と労働者階級の分断のほうが早いはずなのですが、日本の場合そんなに時間的な違いがないという気がします。

次に[補註・3]を見てください。それの[(ｖ)「客分」の行く方]のところは、前回話しましたので、今回はふれないでおきます。牧原憲夫の「客分と国民のあいだ―近代民衆の政治意識」という文章は、僕にとってはとてもおもしろかったんです。「支配あるところに客分あり」という、「客分」というのは牧原という人によると、基本的には権力と民衆との間の距離が遠くて、民衆と権力が交代するということがないと想定されている、というニュアンスで使われていることが多いのですが、封建秩序のなかでは権力層と民衆というのは交代するというのは考えられない時代でした。しかし、近代になれば理念的には交代することが可能でありうる、というのは前提になっています。権力を持っているものと権力を行使されるものとは、交代することがありうるのだというのが近代の理念のひとつだと思うのですが、そうであっても自分が権力者にならないかぎり、この社会で生きようとする人間が持つ基本的スタンスとして、「客分」というスタンスは今でも存在すると言っていいのだと思います。僕・らは、自分たちの存在が全て「国民」という一色で塗りつぶされて、存在して生きているわけではないでしょう。

だから、「客分」という在り方というのは、僕・らの中にも今でもあるというふうに考えたい。「支配あるところに客分あり」。そういう意味で、「客分」という考え方をすると、非常におもしろいのではないかと思います。

今回、(ｖ)のところで、「『革命』タア『主』になることかと八の言い」、「『維新』タア『主』になることかと八の言い」と書きました。昭和期に入ってからの革命の行方が軍事クーデターの行方にすり替えられていくわけですが、「昭和維新」は右翼の思想の中では自分を決起させる重要なタームだったわけで、どっちの場合にしたって「客分」を主人に替えることなのか、というのが八の言い分です。要するに、革命とは主人をすげ替えることか、というのが「客分」の発想です。これはとても健全な発想だと思います。

しかし同時に、「客分」というのは絶えず変動していて、どこか一か所にとどまっていない。だから、国家が命ずるよりも過剰になってしまって「南京大虐殺」を引き起こしてしまうのも「客分」が主人公になった気になってしまう、そういう在り方のうえで起こった出来事です。国家が期待する以上に過剰な殺戮をしてしまうような面も含んで、「客分」なのだろうと思います。その辺のところは、吉本隆明がいう「大衆」とかなり近いような気がします。かなりおもしろい人間の存在の在り方の抽出の仕方だと、僕は思っています。

いずれにしろ、「客分」というのは主人になりたがらない。その主人にならない、「ならなさ」がいい。そこだけを取り出せないから過剰に人を殺してしまったりするような要素も同居しているのが「客分」ですから、上手にそこだけ取り出すというふうにいかないのが「客分」というものの在り方なのかなあと思います。

前回渡した資料を見てください。(18ページの)資料(＊1―⑦)です。ちょっと読んでみます。それこそさっき言っていた、「友愛会」がだんだん戦闘的になっていって「労働総同盟」という名乗り方をしていくことになるのですが、これは 1920 年です。1918 年からわずか 2 年後。そこのなかで、こういうことを言っている。誰かが言っているのを引用し

たんだと思いますが、「労働者は資本家と同じ国民じゃないのか。一つ労働組合で声をあわせて、大きな声を挙げて叫ぼうじゃないか。この失業をどう解決するとね、国家に聴くのさ。お役人衆に、叩頭をして回るのは、資本家のすることだ。腹が減っても労働者だ。解決策も国家に諮るべきだ。国家が解決できなければ、国家は滅亡しなければならぬ。決して国家は黙ってはいないだろう」。この先のところです。今度は「前衛」から――1922年に「日本共産党の結成」があります――その機関紙に出されたものです。「資本主義とは『人間を狡猾に正義も道徳も無視して、自個主義一点張りに金のためきゅうきゅうとして、何ら他人を顧みない。言わば非人道主義制度』」、これは「友愛会」が出していた新聞にあった言葉なのでしょうが、それをうけて「だが、失業という「国民」の難儀を「国家」が黙って見過ごすはずはない、というわけだ。私利の追求という「悪」のイメージ、「国家に聴く」という形で示される　”おかみ”への期待など、米騒動に噴出した民衆の徳義と仁政の観念が労働運動にも脈々と流れていたのだ。」――これは牧原という人が書いた文章です。「ところが、争議になると意外にも警察は不徳なる経営者の側に立って労働者を弾圧した。『我々は今横浜船ドック会社と闘っている。資本家の頑迷と貪欲は今に始まったことではないが、警察の横暴はいったいどうしたのだ。なんだか知らぬがわれわれはまるで、国家と政府を向こうに回して闘っているような気がする』」。できたばかりとはいえ、「前衛」にそういう文章が載っています。

この前も話題になっていましたが、最近、小林多喜二の「蟹工船」が話題になっていますね。僕はあれを「映画」化したものを昔視た記憶があるのですが、記憶に残っているのは、白黒なんだけれど、「蟹工船」があって向こうが海なんです。蟹工船から向こうを見る視線で、そこに軍艦が現れて来る。当時の駆逐艦だと思いますが、それが、この争議を聞きつけて労働者を助けに来たんだと、みんな思うわけです。一生懸命手を振ったりしている。そういう場面が印象的でした。まさに、これですね。悪辣なめちゃくちゃな労働条件の中で、企業側が酷使する。それで一斉蜂起するわけだけれども、当然無線かなんかで伝わっている。それを聞いて、軍隊が出動してきたということです。労働者は本当に自分達の味方が来たんだと思っているように見えるように作ってある場面なんで、まさにここで言っているとおりです。

この辺っておもしろいというか、今だって労働争議というのは「民事不介入」ということになっている。労働争議そのものには介入しないというのが原則です。それだってある種の「客分」という意識が働く余地が、まだそこに残っているということだと思う。しかし、ある段階が来れば、「民事不介入」どころではなくなる。その辺の境目というのは、今でもよく見て活用できる面がないわけではないと思うところがあります。

そういう意味で、「モラルエコノミー」という発想とか「客分」のある種のスタンスの取り方というのは、今でも全く無意味ではないと思います。とにかく「客分」というのは、そういう意味ではよくわかるようでわからないような、人間のある存在の仕方というのを、うまく抽出した言葉なんだなあという気がします。

iv　さらに、その〈先〉へ

それでは、私・たちは「米騒動から受けとって、それでどうするか」ということについて、少しふれたいと思います。

それについては、[補註・3]の[(vi)「米騒動」から何を受け取るか？そして、その〈先〉へ]のところを見てください。線分$\overline{AO}$の「補註」としてそこに書いた「ネオリベ「ポリティカルエコノミー」への包摂」というのは何を表しているかと言えば、現在、「ネオリベ」の市場原理主義に人間を包摂していく力が作動しているということです。先ほど伝統的な民衆運動の中の「仁政－モラルエコノミー」(「徳義ある経世済民」)への要求ということを話しましたが、そのことを線分$\overline{BO}$の「補註」で「「客分」の現代的転成とは何か？」と書いたことに引きつけて言えば、それは、「ネオリベ」的な包摂に対抗しうるような「客分」というあり方の現代的な「転成」とは何か、という〈問い〉になるのではないかと思います。

先ほど「危険な階級」と労働者階級の連続性と言ったことを現在の状況に関連させて言えば、線分$\overline{BP}$＋線分$\overline{CP}$というのは、その「補註」にも書いたように、「「保障されざる者」／「不安定雇用者」の連続性・連結性とは何か？」という〈問い〉になるでしょう。線分$\overline{AQ}$というのは、現段階における「社会的なもの」の構成のあり方を表しています。それは、この間よく言われる言葉で言えば、「ポスト福祉国家」における「社会保障」・「社会福祉」の縮減です。それに対して、線分$\overline{CQ}$というのは、支配の側によって構成されている「社会的なもの」を逆に民衆の側が構成しなおすということを表すものです。その「補註」に書いたように、私・たちが「「社会的なもの」の構成を構成しかえすとはどういうことか？」という〈問い〉が、そこにあります。

そのような一連の〈問い〉が、「『米騒動』から何を受け取るか」の〈先〉を考えようとするときに、浮かび上がってくる気がします。

次にいきます。[補註・3]の[図・9’]の周囲にいろいろと書いてあるのは、私なりにそれをもう少し中身をもって言おうとして書いてみたものです。[図・9’]では、線分$\overline{BO}$の横に「ネオリベ「ポリティカルエコノミー」からの逃散／脱出」と書きましたが、それは「ネオリベ資本主義」と言ってもいいのですが、線分$\overline{BO}$と線分$\overline{AO}$の「せめぎ合い」というのは、ネオリベ的「ポリティカルエコノミー」によって人々を包摂しようとする力に対して、どのようにそこから逃げ出したり、はみ出したり、脱出を図ったりするか、ということになります。

それこそ、まさに私・たちが言う意味での「オートノミー（自律)」であり、イタリアの「アウトノミア運動」と言うときの「アウトノミア」ということではないかと思います。「資本主義の中で資本主義から逃れた複数の外部を創案する」、「資本主義のいたるところに穴を開けて生きていく方法を探し出すこと」。これは、韓国の研究集団の「スユ＋ノモ」のメンバーの李珍景（イ・ジンギョン）という人が書いた文章の中の言葉ですが。彼らが営んでいる「スユ＋ノモ」という研究空間がどのようなものか、という文章の中で、そのように言っています。

それをもう少し違った言い方でどのように言うかということで、点Oの横の「自律」と書いてある部分に(＊1)として「註」をつけたのですが、その下の部分に「だれにもまねのできない『手に負えないスタイル』を有したマイノリティになること」と書きました。

これは、渋谷望さんの「魂の労働」という本の最終章の、「生が労働になるとき」にある言葉です。つまり、人間が自分の「労働力」を売ってそれが「賃金」となって返ってくることで生きるというのではない、資本主義的なあり方からはずれたところに自分の「価値」を創るというか、イタリアの「アウトノミア運動」でよく言われた言い方をすれば、「自己価値創造（self-valorisation）」ということです。それは、つまり、「資本の承認を必要としない純然たる自己肯定」ということではないかと思いますし、さらに言えば、資本の外に出るための「尺度」を創る、ということだと思うのです。今でも、「客分」という在り方があるとすれば、「自律」を求めるということの中に、そういったことがあるはずです。それは、ネオリベ・グローバル資本主義からいかに脱出・逃亡するか、ということでもあるでしょう。現在の高円寺界隈の「素人の乱」なども、かなりそういったことに近いものではないか、と思います。

［図・9’］で「ネオリベ「ポリティカルエコノミー」からの逃散／脱出」という言葉の先に、「生の自律／共同的価値化＝新たな生き方の集団的創造」と書きましたが、それが先ほど言った「自己価値創造」ということです。つまり、個々の人がどう生きるかというのではなく、集団的に資本主義にからめ取られない生き方をいかに創造するか。そのことを空間的に表現するあり方を、「素人の乱」の人たちは示しているように思います。それを一言で言えば、先ほどから言っているような意味での「自律」ということになるのではないか、と思います。

そういう「客分」というものの現在的な在り方がもしあるとすれば、そういうことの中に現れてくるものだと言えるでしょう。それは、自分たちなりの「モラルエコノミー」を現代的に編み直していく、組み直していくというか、そういうことだろうと思います。

それが片方のことだとすると、もう片方のQの方です。これは「自律」に対して言えば「保障」ということになります。これは、さっき言ったように線分$\overline{AQ}$が現在の「ポスト福祉国家」における「社会保障」・「社会福祉」の削減です。その力に対して線分$\overline{CQ}$がそれに対抗する力です。「社会的なもの」の構成を民衆の側が構成し直すというあり方のことです。それは、前から少しずつ言おうとしてきた言葉で言えば、「すべての生の無条件の肯定の保障」です。そして、その「社会的なもの」の再構成の核心にあるべきなのは、「すべての生の無条件の肯定を保障すること」です。いわゆる「労働力商品」であることから脱することのあり方――「労働力」が「商品」として売買されることを前提にした中での一時的な「労働力脱商品化」のことでなく、「社会保障」という、高齢者に対する「保障」は、「労働力」を散々売ってきて、年をとったからもう売らなくてもいい、生きていてもいいと認めてもらえるようなことではなく、――「労働力商品」として人が存在するあり方自体を否定する、それから逃れる、そういうことにあたることを軸にして「社会的なもの」を構成し直す、それが「保障」ということの意味です。そのことを考えるときに、例の「ベーシックインカム」＝「基本所得」が誘発的な「概念」として使われています。「保障」というのは、「基本所得」とはなにか、というふうに立ててもいいようなことだと思います。

そんなふうな「自律と保障の同時獲得」をめざしていくと言うことが、「米騒動」から受け取ってそこから「現代の米騒動」を考えていくときのポイントだと思います。三角形

ABCの各辺の中点を点線で結んだ逆三角形のところは、古くさい言葉で言うと、「二重権力状況」を表しています。ようするに、「米騒動」にあたるところが一番大きな面積をとるときが、これになります。向こう側にあるのが今日の支配の秩序だとすれば、それに対して逆三角形のところが「二重権力状況」みたいなものとして存在していることを表しているつもりです。

「もう一つの生き方／働き方／支え合い方を社会経済のレベルで現実的・具体的に集積していくこと」。もう少し現在風に言い換えて、「「保障されざる」ままで「不安定雇用」のままで自律／保障を引き寄せ立ち上がらせる生の集団的構成」というように言いたい。資本主義というメカニズムで動いている社会に、そういうものがボコボコできる。そういうものがボコボコできて、上の三角形と対峙しているのが「二重権力状況」と言えます。このような言葉は死語に過ぎず、誰も使っていませんが。

90 年前の「米騒動」から何を受け取って、何を持って「現代の米騒動」にもう一度戻っていくのか――というときに、受け取って、持っていけるものは、いま言ったことになるのではないかと思います。これが結論です。これらの言葉は上手く言い表せていません。そういうふうに言うことが普遍的に成り立つかは、よくわからないままで言っています。生煮えの言葉です。上手く使えていない言葉ばかりです。要するに、ネオリベ「ポリティカルエコノミー」、あるいは資本主義からいかに逃亡するか／いかに脱出するか。資本主義の中心部で、資本主義から逃れた「外部」をどしどしつくること。一方で、そういう生き方を一種の「保障」として認めさせることです。

いま、いわゆる「保障されざる者たち」、「不安定雇用労働者」などといわれている人たちが、自分たちの生存をめぐって、「生存組合」として自分たちを立てていますが、その時彼らが考えていることは「福祉国家」を再現したいことではなく、「福祉国家よ、もう一度」ということではいと思います。簡単に言えば、「不安定雇用」に対して言えば、「安定雇用」、「終身安定雇用」、「完全雇用」をめざしているのではないと思います。そういう点からフリーター労組、インディーズユニオン、小さなユニオンなどがめざしているもの、もとめているものを点検してみたいのです。

そういう人たちが求めていることは、決して、かっての「福祉国家」の時代の「安定雇用」ではないのではないか。では、それはなんなのか。それにあたる、名指す言葉を未だ見つけていない。あの人たちも見つけていないし、僕たちも見つけていない。そこを模索しているのが、いまのインディーズ系労働組合、ユニオンの人たちだと思います。「社会保障」、「社会福祉」が充実していくこと、北欧型の「福祉国家」として日本のあり方がそういうところへ行くことを、「保障されざる者たち」が望んでいるのか。それもそうではないのではないかと思います。それこそ平井さんではないですが、「反貧困」ということは、貧困に対して「反貧困」ですが、「反貧困」とは何か？わかったようでわからない。「反貧困」の〈次〉は何か。おそらく「保障されざる者たち」が求めていることは、「反貧困」の〈次〉に、あるいは〈次〉の〈次〉に出てこざるを得ないことなのかと思います。

そういう意味で、「現代の米騒動」というように自称もし、他称されるそういう言葉が表しているものは、実は、厳密に考えてみると何のことかわからなくなってしまいます。

「福祉国家よ、もう一度」では、決してない。いまの日本の国会政治のレベルで言えば、民主党は「民主社会主義」的要素を簡単に取りこんで、せいぜい「社会民主主義」的な発想にならないようにするのが精一杯。「なんとかよ、もう一度」ということになる。

民主党、社民党、共産党も「福祉国家よもう一度」を超えるような〈言葉〉を言えているようには思えない。であればこそ逆に「社会民主主義」的な社会を超えるような〈言葉〉を考える必要があると思います。「人間の社会」をどうつくるのかという理念の問題では、「社会民主主義」を否定することはそう簡単なことではなく、ある種のリアリティを持っている言葉だと思います。「福祉国家よ、もう一度」と言うことは、「社会民主主義よ、もう一度」と言うことです。そういうところに行かないで、「保障されざる」ままで、「不安定雇用」のままで、おれたちはおれたちの価値観で生きるよ――そのことをどう現実的、具体的に目に見えるものにしていくかということにかかっています。

山口さんたちは、そういうことを日夜一生懸命考えていると思います。ちょっとしたことにたくさん〈妄想〉をつけたと言っていましたが、まったく共感しています。どんな小さなことにも過大な価値付与をしてみることが、いま必要です。〈言葉〉がないからです。「これなんだ！ここへ行こうよ！」と簡単に言えないからこそ、いろいろな価値付与、〈妄想〉をかき立てて、そう言ってみるしかないところがあります。〈言葉〉が生まれれば〈妄想〉ではなくなる。〈妄想〉する必要がないからです。でも、いまは〈妄想〉に〈言葉〉が追いついていない。〈言葉〉を〈妄想〉でうめていくしかない。山口さんたちは、「麻生邸リアリティツアー」の〈先〉を考えているようです。

ちょっと長くなりました。もう少しおつき合いいただきます。ようするに「米騒動 90 年」をやったのは、まだまだ〈妄想〉をかき立てないと、〈妄想〉力が足りないよと強く思うからです。

v　おわりに

結局いろんなことがやれていれば、「米騒動 90 年」ということをいちいち取り上げる必要がないのです。自分・たちとしては、そこのところで一歩でも二歩でもなんか違うことがやれるというか、それはどんなに〈妄想〉まみれでも、なんでもいいからやろうというか、やらなければ、「米騒動 90 年」と言う価値はないと思います。僕・らもそろそろ半分ぐらいは自分・たちで考えなければいけないと思います。自分・たちが思いもしない、考えもしない、着想もできないことを考えている人がいるわけですから、そういう人たちから大いに〈言葉〉をもらう必要があり、刺激を受けなければならない。それは半分ぐらいで、後は自分・たちが、自分・たちの〈妄想〉をかき立てて行う必要があると思います。

この前の 11 月にやって以来、僕は、率直に言って、「米騒動 90 年」というふうに立ててやろうとしたことが、どういうふうにみなさんの中に収まったのか、あるいは下痢したのか、そういうことがどうなったのか、ずっと気になっていました。そういう意味であのままで、自分が言ったことはあそこで終わりということでは困るという感じが自分にあったので、今日このような時間を作ってもらいました。実は、それでも本当に考えなければならないことに距離がまだまだある。やっぱり「米騒動 90 年」というふうに言うからには、言っただけのことがなければならないと思います。

このところ一番やりたかったのは、「ハローワーク」の前で「炊き出し」をやることです。それはなかなか「うん」と言われないことだろうな、認めてくれないことだろうな、黙ってやろうとしたら難しいことだろうな、と思っています。今までの「ホームレス支援」ということをいっていたことから、自分たちだけでもちょっとだけ「離陸」したいわけです。「ホームレス支援」ということを考え、やり始めたころに、「ホームレス支援」ということがもっている社会的拡がりがこんなに早くなるだろうということをあまり想定していなかったのです。本当にこの１，２ヶ月の間に一挙に進んだ、いわゆる「派遣切り」ということを考えれば、今年の 1 月頃にそういうことだって、想定してもいいことだったと思います。必ずしもそこまで想定していなかったのですが、それをやっていたから、今、その「派遣切り」ということもリアルに受けとめることができます。これから先、この動きというのは簡単に止まらないでしょう。すごくリアルなものになってくると思います。この 1 月からやってきたことは非常にたかがしれているのですが、支援をすることによって「ホームレス」存在が可視化してきたことだけはまちがいないと思います。「ホームレス」存在がそこいるから、それで可視化されていたのではなく、支援することをしたから可視化したのです。これは、やっただけの価値はあったと思います。可視化するということは、当事者からすると可視化されるということで、すべて幸せかという大きな問題があります。あんまりのんきな顔をしていうことはできないのですが、少なくとも富山では支援することにおいて、初めて「ホームレス」が見えるものになり、まちがいなく富山市の生活保護受給率を高めることに貢献しました。それは価値だと思います。問題はそこに止まっているのなら別にどうということはないのですが、そこから何が繰り広げられるかということに入ることになっていかなければならないのではないかと思っています。

↓ここから先は勝手に直しました。水橋

この前の 11 月にやった後、この 12 月になって「派遣切り」がわっと広がりました。ではどういうふうに今までのことと「米騒動」ということをはさんで、「派遣切り」に対して僕らが対応していけるのか、ということをとてもリアルに感じています。そういうところに来たな、そんなところです。

この後に 1、2 月にインディーズ系ユニオンの動き、「素人の乱」の動き、「反貧困ネットーワーク」の動き、これら三つぐらいの動きに関わる資料を集めて、整理して、認識を深めることをすすめたら、と思います。それを 5 月にやることにつなげたいというふうに思います。それが一つ。

もう一つは、いま言った「ホームレス支援」ということ、これはとても小さいところでやっているように思うかもしれないし、小さいところでしかやれてこなかったけれど、今になってそうではないのだとあらためて思っています。そっちの方にどういうふうにそれらを生かしていくか、ということを考えたいと思っています。それでとりあえず、いまにつながったと思います。